

310-47
| X

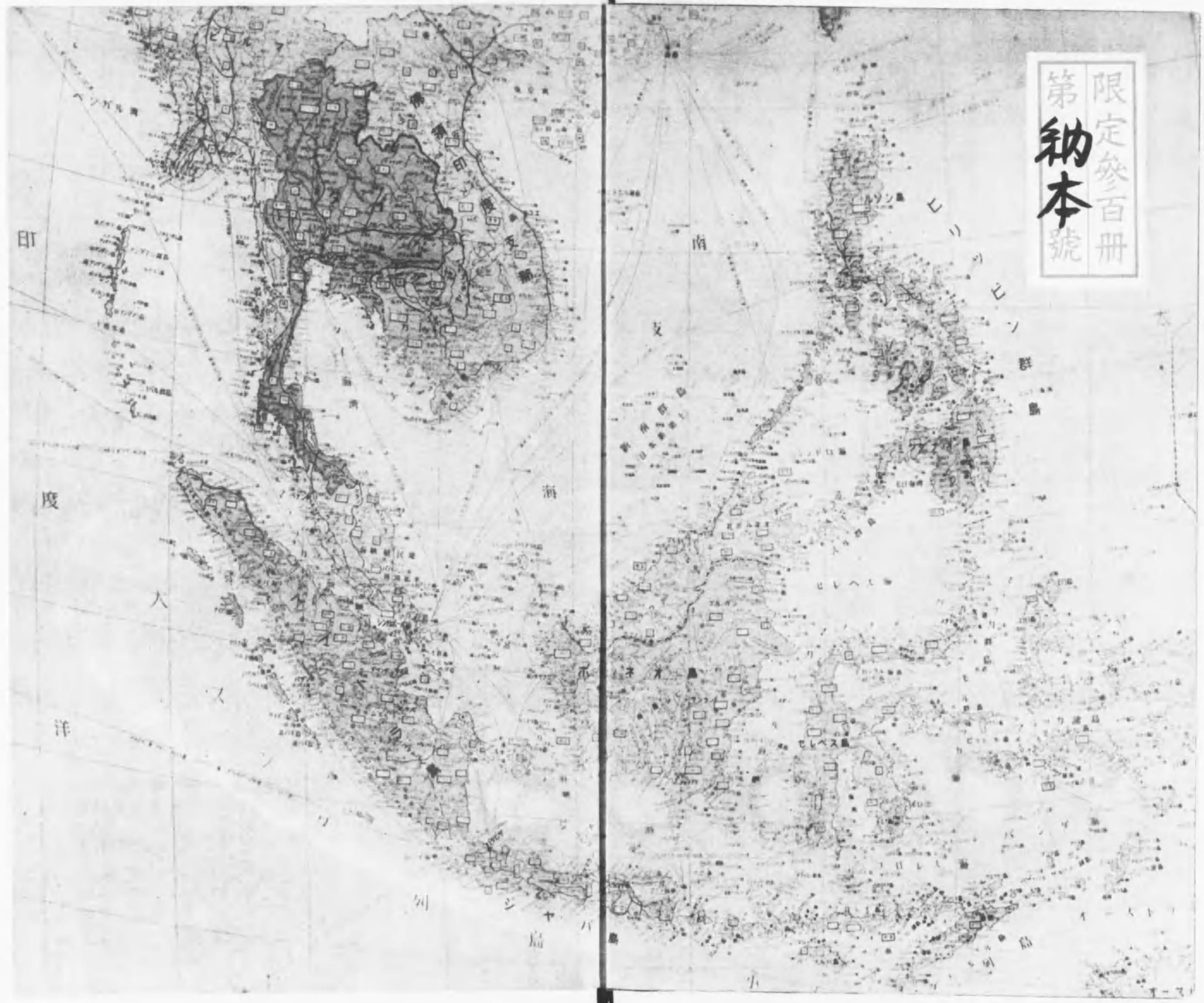
310
47



始



限定參百冊
第納本號





ホーストリカルテ



310
47

序

ここにアジア復興の柱石として、日本に亡命せる印度獨立運動の首領ラス・ビハリ・ボース氏とフィリッピン獨立軍の總帥アルテムオ・リカルテ將軍の傳記を上梓するは、吾人の甚だ光榮とし、且つ欣快にたへざる所である。本傳は大正十三年と十四年に『東洋』誌上に公けにせるもの。今これを改めて一冊になすは、二氏に對して衷心より祝意を表すると共に、日本に於ける二氏に關する最初の傳記的文獻を、既に獨立せるフィリッピンと、獨立の近からんとする印度に、捧げんとする微志に他ならぬ。蓋し大東亞戰爭に對する吾人の滿腔の悦びを披瀝する一端である。

ボース氏傳はタラクナート・ダス氏の手記と、藤本尙則氏著『頭山滿傳』と相馬愛藏氏の直話によつたが、誤記が多くボース氏を苦笑せしめた。

リカルテ將軍傳に至つては、スペイン語を解せざる余が、英語の不十分なる將軍



から、片言まぢりに聞き出すのは、啞の會話に似た。それで余はフィリッピン史を参考にしつゝ、宇佐彦磨氏の追想談を手記するに止めた。氏は前フィリッピン獨立戰に、リカルテ將軍と具さに辛酸を共にした隠れた志士だ。

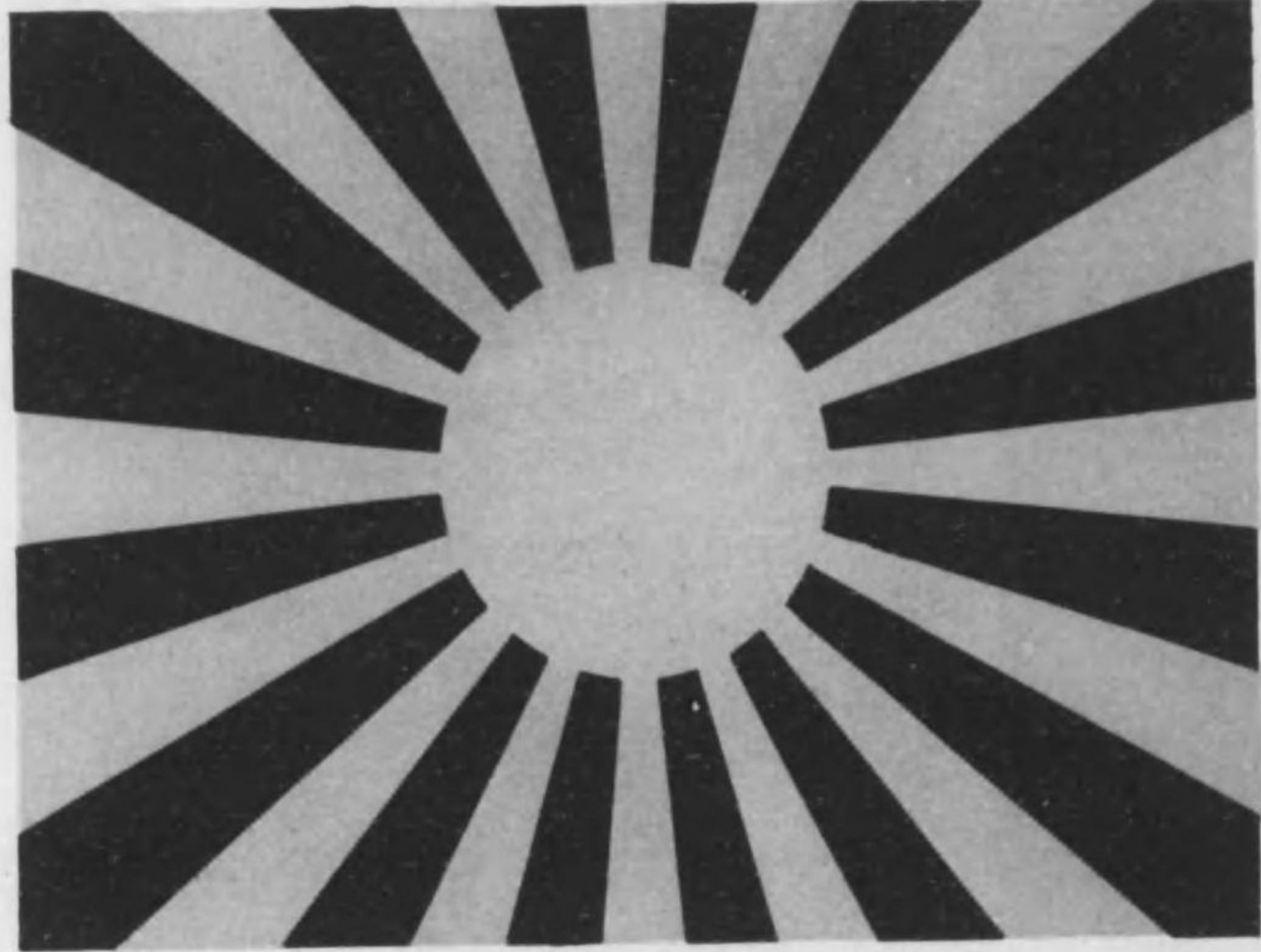
さりながら本稿は元來、純正の傳記を目的とせるものではない。英米に屈辱せる往年の日本に慷慨悲憤せる一詩生が、切齒扼腕の情焰を、一管の筆に託して、同胞が英米の奴隸思想から覺醒して憤起すべき使命を熱訴した散文詩だ。

故に最初より正確を缺くの謗りを後世に買ふの不名譽を甘受して、幾分か小説的にした點も少からぬ。正確の眞傳に至つては、別にその適者を待つ。

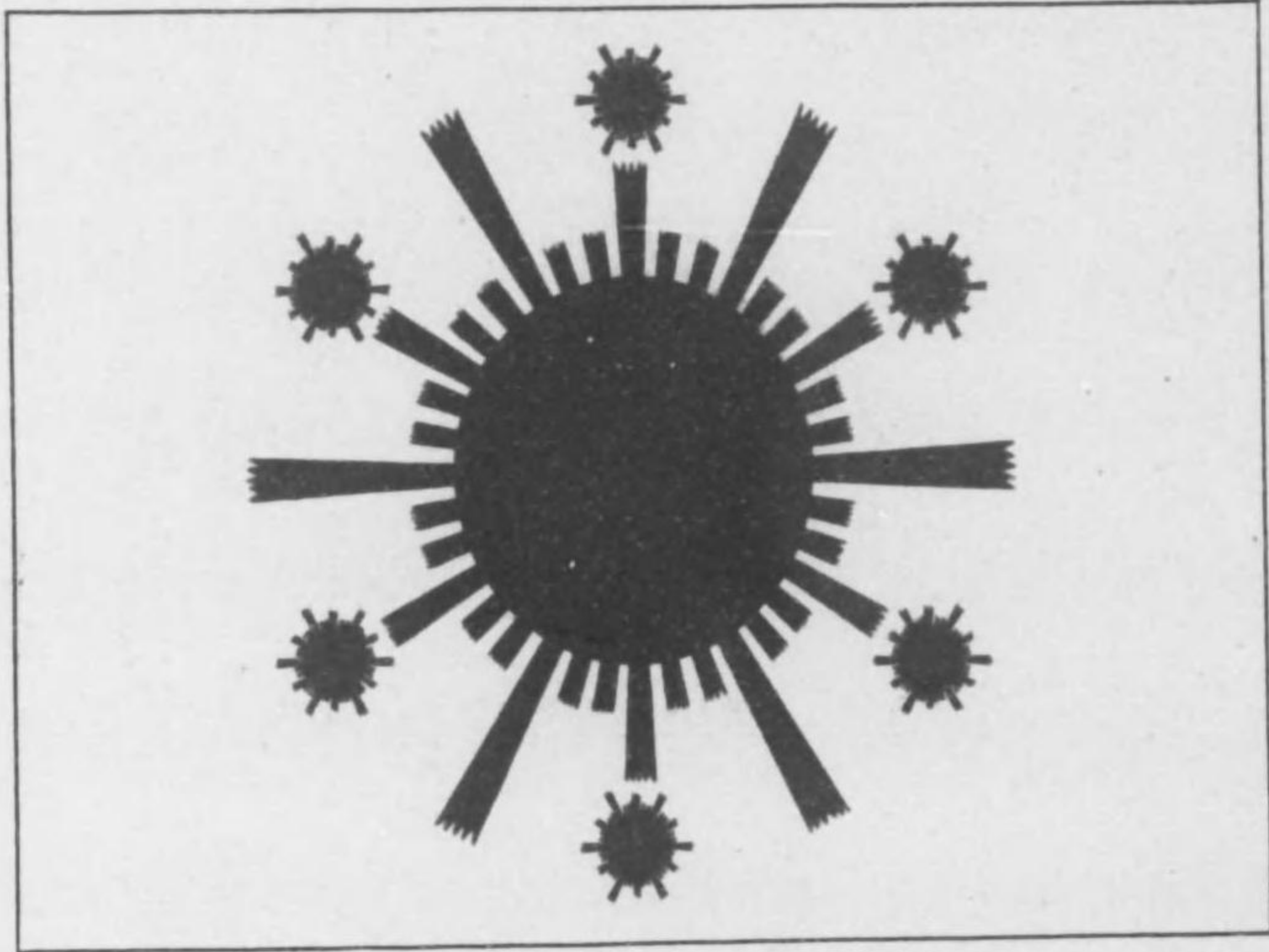
本書は三百冊の限定非賣となし、一號より二百號までの奇數號をボース氏と相馬愛藏氏に、偶數號をリカルテ將軍と宇佐彦磨氏に贈呈し、残りの百冊を余の知友に分つ。

紀元二千六百二年紀元佳節

中山忠直



獨立國旗試案



案試旗國ソビツリイフ立獨

國旗の相

—印度とフィリピンに國旗の圖案を奉呈す—

手相、人相、骨相のある如く、國旗によつてその國の性格と未來を占ふことが出来る。

日本の「日の丸」は太陽の象徴であり、太陽が太陽系の支配者である如く、日本は世界の人類國家を統率する約束にあり、何國も日本に敵對することが出来ぬ。

清朝時代、支那は「龍が日を呑まんとする」旗印であつた。龍は日を呑まんとして、大火傷をなし、清朝が亡ぶる因をなした。今日の支那の青天白日旗は、三角形の光芒が日輪の周圍に花瓣の如く取り巻いてゐるが、これは衰亡の徴である。凡そ太陽の光は日本の聯隊旗の如く、光芒が無限に擴大して宇宙の隅々に届くべきもの、青天白日旗の三角形の光芒は末つぽまりで、太陽の冷却の姿である。それは蔣政權の姿に似てゐる。

— 3 —
ロシアは帝政時代は旗の四隅から、青の×が交叉するものであつたが、×は抹殺の印で、ロシ

アは日本と戦つて自らを抹殺自殺した。現在のソビエト・ロシアは赤地の隅に、農夫の鎌と職工のハンマーを交叉する圖が、小さくついてゐる旗だ。これは勞農の天下たるや、實は名目のみで農夫と職工は赤色理想の片隅に小さく押し込まれてゐて、勞農の實生活が不幸なるを示す。眞に勞農の天下ならば、旗の眞中に大きく、鎌とハンマーが描かれて居る筈だ。

アメリカの星條旗は、夜の世界の旗たるを表はす。夜は百鬼夜行の時だ。アメリカは國として魔界的に墮落すべき國家たるを示す。魔物の分際で、日天子に弓を引かんとして、天罰は直ちにハワイに下つた。

イギリスの旗は青地に赤線が米型に交叉してゐる。青は海の色。一時は七つの海を雄飛せしも、遂に赤線の抹殺する如く四分五裂に終る運命を示せり。

ナチス・ドイツは逆世の旗印だ。正は昔から死者の印だ。ナチスはこの死の符號を逆に出して、起死回生の偉業を完成した。

イタリーは三色旗の中に王冠ある旗である。三色の緑は希望を現はし、白は誠實を示し、赤は情熱を象徴してゐる。この三つが王室を守つてゐる。ファッショ革命が起きても王室がゆるがな

かつた所以である。

イタリーの三色旗が三つの精神的要素を表はすに反し、三色や五色で民族の結合を示してゐる國旗がある。この民族の團結を表はした旗の國家は、必ず分裂か内紛を伴ふて、瓦解する宿命にある。滿洲國旗は更に考慮を要するであらう。民族は團結すべきでなく、融合すべきものだ。

以上の原理は、更に細かく萬國の旗について論じ得るところだ。が今ここでは一々それに論及するの暇がない。

故に今、フィリッピンの獨立と、印度の近き獨立を祝福して、余は余の「旗相學」より見てこの二國家の將來に永遠の幸福をもたらすべき圖案を作製して奉呈することにした。

フィリッピンの國旗を、日の丸の周圍に配するに、大小六個の月をもつてしたのは、フィリッピンの六民族を示す。太陽の周りを種々の衛星が仲良く運行する如く、フィリッピンの六民族が結合して、日本を中心として幸福を享くべしとの意味である。

印度の國旗を、日本の聯隊旗に似た形を黄色をもつて現したは、印度が大日如來、日輪の國たるを示す。黄色は黄金の代用で、黄金は旗に用ひて重くて實用に適せざるが故に、黄色をもつて代へたに外ならず。斷じて日本の聯隊旗の模倣に非ず。

目次

序	一
国旗の相	三
印度の獨立運動首領	一
ラス・ビハリ・ボース	一
詩送別	六
ファイリツピン獨立の志士	六
アルテミオ・リカルテ將軍	六
詩 棕栢の花	二六

印度の獨立運動首領
ラス・ビハリ・ボース



影近氏スーボ

一、獨立運動の家柄

ノーベル賞金をもらつた、印度の詩人タゴールの一族は印度の獨立運動の先驅たる國民的自覺の精神作興に、重大な中堅的位置を持つてゐる。彼の父デーベンドラ・ナート・タゴールは梵教會の第二祖として、同教會をして今日の盛大を致さしめた宗教家であり、その從兄弟のうち兄のガガネーンドラ・ナート・タゴールは素人畫家として知られ、弟アパニーンドラ・ナート・タゴールは本職の畫家で、カルカッタ美術學校の副校長として、同校の全權を握り、共に印度美術復興の最も有力なる貢獻者である。



いまここに僕が語らんとする、ラス・ビハリ・ボース氏も亦、このタゴール族の一員であつて、武斷的に印度の獨立を計つた印度の最大なる一柱石である。天運未だ時を貸さずして、東方の一島嶼に亡命の悲みにあるが、彼あるが故に印度獨立運動の武力的方面が囑望されるのである。

彼は印度獨立の曙には總理大臣か外務大臣になるべき人だ。彼が成人して愛國的熱情に殉ぜんとするに至つたのは、彼が幼時から一族の獨立精神を搖籃と

— 4 —
して育つたからであつた。而して彼の生涯も亦、獨立運動家にふさはしき、波亂重疊たるものがある。日本に亡命してゐる志士の中で、フィリッピンの獨立黨首領のリカルテ將軍と共に、亡命客中の双壁である。

二、印度の自覺史のスケッチ

印度の復活的覺醒は約八十年前に溯り得るのであつて、千八百三十年から上代印度の社會的、文藝的、宗教的理想の復興の熱望が、有識者間に激潮と燃えて來たのである。かくてこの精神運動は、いづれの時代に於ても見る通り、先づ宗教運動が先鞭をつけたのである。ラーム・モハン・ロイは梵教會を、ダヤー・ナンダ・サラスワティはアーリヤ教會を作り、次で學術運動が引き續き、これに次いで起り、印度史や古代文學の研究が盛になり、過去の光榮を以て人心を鼓舞し、古代劇や國民音樂の復興を見、カルカッタ、ボンペー、グジャラートその他の都市で古代印度の演劇をやる劇場が出來、また印度固有の美術や、建築の復興運動が起きた。この方面に對する最大の貢獻者は先に述べたタゴール族である。

この精神的自覺運動は、間もなく政治的方面にも現はれて來た。そして一八五七年には「獨立の第一戰」と呼ばれてゐる大叛亂が起り、北印度は騷亂の渦中に投じたのである。然しこの運動は五ヶ月の後に鎮定されて、その後はイギリスの巧妙なるスパイ政策や、慘虐なる壓迫によつて、獨立運動は永遠に望みなきかの觀を呈し、絶望と悲哀が全土に充ちたのであつた。

白人種の侵略に對しては、有色人種は、最早や何のほどすべき方策もなかつたかに見えた。この時（一九〇四年）日本は敢然として立つて、世界に恐れられてゐたロシアを撃破したのであつた。四十年前までは支那の屬國と思はれてゐた、名もない一島國——それは日本とその島の住民は云はれてゐた——が噴火の如く列強國の間に現はれて、ロシア、恐るべきロシアを撃破したのである。

小國日本の勇敢とその光榮ある勝利は、俄然として白人の壓迫の下にある有色人種、特にアジアの諸國に希望と勇氣とを鼓舞したのであつた。その中にも被壓迫者の第一者たる印度の自覺奮起は目醒ましかつた。果然、一九〇五年から印度の形勢は頓に險惡を加へた。英國貨物の排斥運動となり、國產品の獎勵となり、イギリスの羈絆を脱せんための自治運動となり、爆彈と短銃と

ヒ首が隨所に閃めいたのである。

印度のベンゴール州は始めは、最も平温な處であつたが、教育機關の増加による啓蒙運動の結果として、羊の如きベンゴールが、たちまち獨立運動の中心、印度文化の復興運動の中心となつたのである。年少氣鋭の青年たちは政府の干渉や警察の壓迫をも恐れず、屢々集會を催して祖國の獨立の演説をした。この不穩の形勢を見て、當時の印度總督カーズン卿は、東部ベンゴール州に回教徒の多數なを利用して、上流印度人の勢力を殺がんとために、ベンゴール州を東西の兩部に分割せんと劃策した。この事をベンゴール州民が知ると、大に激昂して、一九〇五年の八月にカルカッタ市の公會堂に大會を開き、ナンデイ氏を會長に推して『分割反對の實行方法として英國貨物の總ボイコットを行ふべし』と決議し、分割の取消さるるまで、ボイコットを斷乎として繼續すべきことを宣言した、州民はこれを忠實に遵守した、これがために同州の經濟界は一大恐慌を來した。

然しカーズン卿はそれをも意に介せず、十月十六日に至つて敢然として分割を斷行したので、その日には同州は竈の火を消し、素足で家を出て、川や聖槽に沐浴して、大喪に會した如くし、

更に舉國一致の象徴として、聖紐を以て互に手首を縛つて反抗を示したのである。それからボイコットは益々激しくなり、スワデーシー（自國品を）の叫びは全印度に波及し、イギリスの新聞は『かくの如きボイコットは、イギリスと印度の關係を破壊すること、武装せる革命よりも甚だしい』と論ずるに至つた。

この運動に最も大膽に活潑に英貨排斥を宣傳したのは、血に燃え立つ青年學生であつたので、印度政府は先づこの運動を鎮壓する第一段の手段として、嚴重に學生が國民運動に加はる事を禁じ、同運動に加はる者は直ちに退校を命じて、一切の教育を受くべからずとの命令を發したが、これは却つて國民大學運動の發現を促成したのであつた。

政府の學生に對する禁止令が出ると同時に、ベンゴールの有志は國民教育會議を開き、全く政府から獨立した大學を建設し、純然たる國民的組織の下に、哲學、科學、文學乃至は工藝に關する教育を施そうと計畫し、從來印度のあらゆる學校で、最も重要な學科であつた英語をば、第二語學たらしめ、これに代ふにベンゴール人にはベンゴール語及び梵語を、回語にはウルドゥ語、ベルシヤ語及びアラビヤ語を以て、第一語學たらしめる案を立て、盛に州民に遊説する所があつ

た。かのタゴールがノーベル賞金を得た、有名な詩篇は實にかかる國民運動の一端として、ベンゴール語で書かれたものであつた。

この情勢を政府は黙つて見てゐる筈がない。教育は自覺であり、自覺は反抗となる。政府はこの運動を公然に或は隱然に壓迫したのは申すまでもない。茲に於てか人民は言論に訴へて獨立の精神を人民に鼓吹するために、新聞雜誌を以て宣傳に努めた結果、數ヶ月後には國民運動は旺然としてベンゴール州にみなぎり、バンデー・マータラム（母國萬歲）といふ聲が、學校でも街頭でも、私人の家に於ても叫ばれる様になつた。種々なる武術を教ゆる道場が處々に開かれ、ベンゴールの青年は争つて之を學んだのである。

日に日に獨立の思想が盛になつて行き、翌年の一九〇六年の四月にカルカッタで開かれた、ベンゴール地方會議では、各地の代表者が八百名も出席し、東西ベンゴール兩州の有力者全部を網羅したかの如き盛觀で、盛んに排英獨立の氣勢を煽つたので、印度政府は遂に警察力に訴へてその會議を解散し、各地の代表者に向つて、歸郷すべき旨を嚴命したのであつた。

このやうに公會に對する壓迫が盛になると同時に、運動は公然から秘密になり、澤山の秘密結

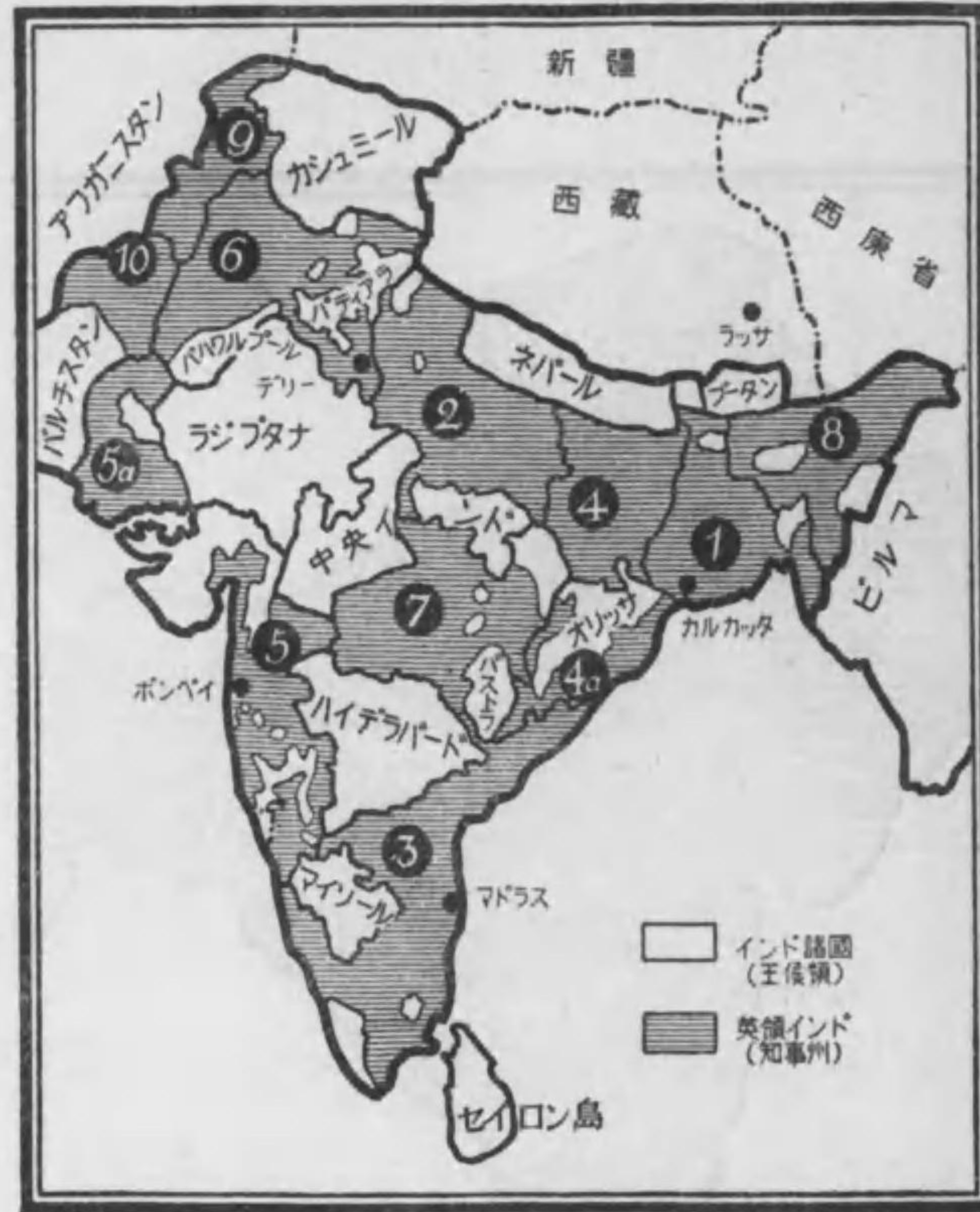
社が出来て、熱血なる青年が皆な之に加はる事になつたのである。一九〇六年から七年にかけて筆禍や口禍のために投獄された志士は夥しいものであつたが、これがために排英氣分は殺がれることがなく、更に更に風潮が悪化して行くのみであつた。

國民の反抗の氣分はカルカッタからガンヂス河を溯つて、バミル高原の南の印度でも、北方の山國であるバンジャブにまで波及して行つた。そしてカルカッタの會議の翌年、一九〇七年の年始めからこのバンジャブに暴動が起り、軍隊内にも不穩の兆が見え出したが、五月に至ると同地方の首府たるラホール市の名士、ララ・ラージバット・ライが突如逮捕せられて、審問も受けず罪名も問はないで、直ぐにビルマの牢獄に投ぜられてしまつた。——これは政府が彼をばバンジャブ暴動の首魁と目したからであつて、カルカッタの政府の機關新聞は、同氏は十萬の兇徒を率ひてをり、アフガニスタン王を説いて印度侵入を企てたと報じた。

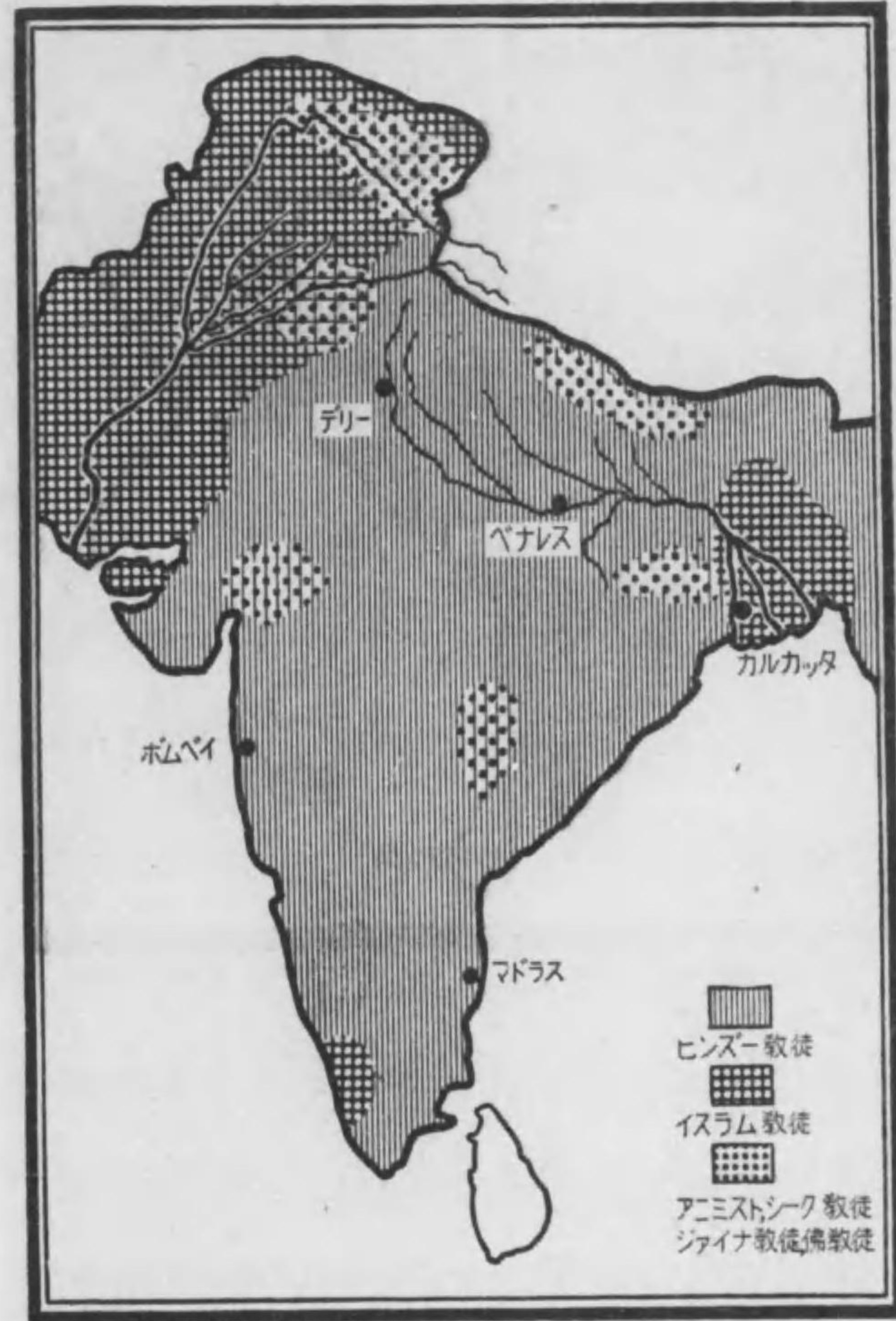
ライの捕縛は上下の印度人の血を沸騰させた。彼は豊富な學識と健全な思想と、純一な愛國的精神と、熱誠なる慈善事業と教育事業のために、印度の上下から最も信頼されてゐた大先輩であつたので、政府が彼に加へた迫害に對して、國民の血が沸き立つたのも無理はないのである。こ

れまで印度の志士で、追放や禁錮や監禁されたものが決して少くはないのであるが、どれでもその裁判によつて罪が決せられると、判決に不服でも、暴力に訴へて之に復讐するやうな事はなかつたのであるが、ライの無理なる逮捕を見ては、流石に平和な印度人も黙つてゐるわけにはゆかなくなつた。血で血を洗へ！ ライを救へといふ聲が叫ばれた。そして血氣に逸り立つ急進黨の志士は、遂に爆弾とピストルによつて官憲の横暴に對抗しやうと決心したのであつた。このライの捕縛を一轉期として、從來文章や言論の運動が、直接行動に變じたのである。印度に暗殺が頻々とは行はれるに至つたのは、これから後のことである。

かくてその翌年の春、ムザッフルプールでインド獨立運動の初めての爆弾が投ぜられた。これは國民運動に奔走せる青年を管刑にしたイギリスの一官吏を、暗殺するのが目的であつたが、誤つて無關係のイギリス人を斃したのであつた。然るにその場で捕へられた暗殺加入者の一人が、意志弱くも、陰謀の顛末を自白したので、同志が悉く捕へられてアリポールの牢獄に投ぜられた。すると彼等はその牢内へピストルを密かに取り入れて、この自白者を獄舎の中で血祭にあげた。この陰謀はカルカッタ市のマニクトラ公園で議せられたもので、今でもマニクトラ爆弾



1. ベンガル州	51,100,000人
2. 聯合州	49,600,000人
3. マドラス州	47,200,000人
4と4a. ビハール及びオリッサ州	42,300,000人
5と5a. ボムベイ及びシンド州	26,300,000人
6. パンジャブ州	24,000,000人
7. 中央州	18,000,000人
8. アッサム州	9,200,000人
9. 西北邊境州	4,700,000人
10. パルチスタン州	0,900,000人



事件と呼ばれてゐる有名な事件だ。

それから間もなくベンゴール州の長官、サー・アンドリュ・フレザーが三度も暗殺されんとし
て危くまぬがれ、ミントー總督すらアーメダバッドで爆弾を投ぜられ、夫妻が辛うじて九死に一
生を得た。同じ暗殺は更にイギリスの本國にまで及び、印度の事務大臣の祕書官ワイターが白晝
ロンドンの街頭で、印度の青年のために暗殺された。その青年は『吾は母國の爲めに賤しき一命
を捧げるの光榮を誇る』と叫んで従容として絞首臺上に立つたことは、更に熱し易き祖國の青年
の心臓に響いたのであつた。

暗殺また暗殺、暗殺は單にイギリス人に對してのみ行はれず、イギリスに忠誠なる印度人に對
しても行はれ出した。

(以上は大川周明著『印度に於ける國民運動の現状及びその由來』より借用したもの)

その險惡な風潮の中に育ちつつ、僕がいま語らうとするボース氏の革命兒としての生涯が始ま
り出すのである。僕はこのボース氏の生ひ立ちをば、タラクナート・ダスの手記を骨子として書

き始める事にしよう。

三、ボース氏の生ひ立ち

印度に暗殺運動の火蓋が切つて落された翌年、印度人は更に暗殺に對する異常な興奮を與へられた。それはわが國の伊藤博文がハルビンの驛頭に於て、安重良のために暗殺された、あの事件であつた。この事件は印度人をして更に、更に暗殺を讚美せしめるに至つたのであつた。

ムザッファルプールの最初の爆弾に刺戟されて、印度の人々は永い夢から醒めたのであつた。次ぎ次ぎの暗殺、そして今度は朝鮮の志士の日本の大政治家の暗殺、それらの物語が印度のジェブルの町に傳つた頃、未だボースは獨立とは何事かを十分に直感せぬほどの若さであつた。

このジェブルの町はラジプタ大土人州の首府で、カチワハの會長はマドホー・シーンフといつて、イギリスからサーの稱號を受けてゐるほど厚遇されてゐたが、一般の土人はイギリスに對しては、反抗の血を沸き立たせてゐたのであつた。

このジェブルの町のはづれには、建築用の石材を切り出す山があつた。——そこで誰が云ひ出

すともなく、夜が更けてから土地の利け者がこつそりと集つて、何事かを相談するといふ噂が立つてゐた。すると更にそこから四十里も隔つてゐるアジメヤにも、同じ様な祕密の集會が開かれるといふ噂が傳はり、いつしか密使が立つて、ジェブルとアジメヤの志士の胸は共同作戦に波うつてゐたのである。

月がはるか地平線上に靜かに動いてゐた。岩石の丘陵の町の軒づたひに、蒼白いその月光を避けて、光を避ける獸のやうにジェブルの若い勇士等が、石切場をさして足音を忍ばせて行くのである。夜警の兵士の重い足音が闇の彼方から近づいて來ると、人々は吸ひ付くやうに壁に寄り添うて身を忍ばせ、足音が遠のくとこつそりと城壁の方へ歩いて行くのであつた。

月の光は冷たく眠つたアジメヤの町を照らしてゐた。この町は山峽の底にあるので、月はことに淋しく哀れに感ぜられるのであつた。城壁の近くにはイギリスの駐在官が住んでゐる大邸宅があり、その大きな人造湖には月が隈なく光を落して、鏡のやうに光つてゐたのであつた。忍んでゆく若者達はその人造湖に照る月を、しみじみと涙ぐんで見れば、やがて赤い城壁の石疊をするすると下りて、燕のやうに郊外の石切場へ急いで行くのであつた。

石切場にはジェブルからの密使も来てゐた。人々は石切場の暗い隅に集まつて、獨立のこと、イギリスの横暴の事を叫んだのである。月は石切場に照つてゐた——サーの稱號を受けて醉生夢死する會長を除いては、このラジプタナ州の土民は、事ごとに蹂躪されてゐる屈辱を怒らぬ者はなかつた。自由と解放と、祖國印度の恢復は、彼等の熱望であつた。

石切場には寶石細工の職人も来れば、印度縵紗の染手や織手もやつて来てゐた。あらゆる階級の、血の氣のある人間が集つて来たのである。彼等は間近く迫る『その日』のことを考へては月を仰ぎ、月の兄弟なる太陽が、やがて黎明の空氣を破つて山岳地方から出て来ることを考へた。

日輪はやがて印度人に照るであらう、そう彼等は考へた。

赫々として輝く太陽を仰ぐとき、印度人は一樣に祈つたのである。百人の愛子を慈くしみ育てた日輪神が、印度人に甦る生命を與へてくれるやうに思はれたのである。

「ヴァイスロイーが来る！」

「ミントー卿が来る！」

「その日は近いぞ」

日輪神を見上げて人達は、かうささやいて手を堅く握りしめたのであつた。集會は夜毎にもよほされ、ジェブルの同志からの牒報が頻々として有志に配られた。これ等の事が石切場で議せられてゐた時、その中心として人々から尊敬されてゐたのは、若きボースの叔父であつた。

印度に駐劄してゐる總督の勢力はすばらしいもので、イギリスに於ける皇帝と同一の権力をもつて統治する任務を帯びてゐたのであるから、ミントー卿の巡視に當つて、シムラでは皇帝と同一の玉座を設けてゐるのであつた。彼の巡視の行列は綺羅を盡してゐるので、土人州の國王は遙かに領土の外まで、いんぎんに送迎するのが習慣であつた。

「ミントー卿が来るぞ」

「太守が来るぞ！」

ジェブルの青年志士は心ひそかに、その日を待つてゐたのであつた。

パロダ州では象の格闘を上覧に供する計畫が催され、十町四方を二三丈の煉瓦壁で圍ひ王宮專屬象の練習に餘念がないとの噂が傳はつて来た。マイル州では一週間にわたる大仕掛の虎狩に太守の威典をひかうとしてをり、幾千人の土人獵師の準備や、狩場の見立や、樹上檣の組立や、

乗用象の仕立方に苦心してゐるとの噂も傳つて來た。これらの象の格闘や、虎狩こそ暗殺にはもつて來いの機會であつた。單に志士は勢子や獵師にまぎれ込んで居りさへすれば良いではないか。

『その日は近い』

『その日は近い！』

志士等は勇氣に充ちた顔をして日輪神ニツギハヤヒを仰いで、ほほえんだのであつた。

その日は次第に近づいて來た。——だが、嗚呼その日は遂に機會を失はねばならなかつた。豫期してゐた『その日』のかはりに、豫期せぬ『日』が近づいて來た。それは死神シヤムの導きによつてもたらせられた呪はしい日であつたのだ。

シムラの政廳には、あらゆる國籍のスバイが備はれてゐた。印度の總ての種族の中の裏切者がみな、スバイとして備はれてゐたのである。陰險な狡猾な野良犬のやうなスバイ共は、巡禮者になつたり、志士の顔をしたりして、野良犬が路上の汚物を嗅ぐやうに、東から西へ嗅いでまはつてゐたのだ。同じ印度人でありながら、同じ印度人の熱ある人間の心を嗅ぐために歩いてゐたのであつた。

人類に光榮の歴史のある限り、呪はるべきスバイ共によつて、裏切者共によつて、待ちに待つてゐた『その日』も遂にふちこはされてしまつたのであつた。パロダ州の象戲も、マイソル州の虎狩も、二つの町の志士が利用するには、天はまだ時でなかつたと見えるのだ。

待ちに待つてゐたミントー卿の來る日に先だつて、雲のやうな英國兵や土人兵や巡查が、二つの町へ入り込んで來た。そして有無も云はさず、人々を珠數つなぎにして、白晝の大道をば獸でも追ふやうにして、驅り立てて行つたのである。

その中で四十年配の偉大な風貌の壯漢が、轟々と縛られて四五人の兵士と巡查に圍まれて行くのだ、壯漢は胸を反らし首をあげて、意氣昂然と街の群集を見て行つた、群集は街の英雄の彼をば、無量の感動を腫に籠めて見返したのであつた、彼こそポース君の叔父であつたのだ。

群集にまちつて幼いポースは叔父を見送つた。叔父も目で最後のお別れをして行つた。ポースは飛び出して兵士共に喰つてかからうとしたが、街の人々に引きとめられてしまつた。そして人々は早くポースに街を逃げて行けといふのであつた。目の當りに叔父は捕はれて行く、そしてそれは年少なポースには、どうすることも出来なかつた。

この時だ、ポースの心に、深い決心が宿つたのは。少年の夢は俄かに覺めて、印度は今如何なる有様か、イギリスは我等の上に如何にして君臨してゐるか。叔父のための復讐である。祖國印度の恢復である。彼は始めて彼の使命をさと、印度を背負つて立つ勇氣が心臓から血管を逆に流れて起つたのである。

憎悪と嘆聲と沈黙が二つの町を包んでしまつた。「その日」の代りに「この日」が來たのであつた。街の群集は泣いた。その沈黙の街をば、意氣におこつた顔の兵士に追はれて可憐な憂國の志士が、幾組も幾組も通つて行つたのだ。

刑場は砂漠から近い荒れ野であつた。日はかつと著く照らしてゐた。刑場には一人の僧侶もゐなかつた。志士達は順次に少しも怯れた様子もせず、指定の場所に立つたのであつた。

彼等は十人づつ並んで立つた。一人の士官が指揮刀をさつと振ると、立射のかまへをしてゐる兵士の銃口からバツと白煙が立つて、彼等はばたばたと熱砂の上に倒れて行つたのである。殉國者はかくして皆な死んで行つた。

このやうな陰謀や暗殺が頻々と起るものだから、一九一一年の十二月にはヨーロッパがモロッ

コ問題で紛糾してゐたにも拘らず、イギリスの皇帝は遙かに玉輦を印度に運んで、最も莊嚴な即位式をあげ、一面に於て印度人を威壓すると共に、在印度のイギリス人の志氣を鼓舞したのであつた。そして、この機會を利用して、分割によつて不穩であつたベンゴール州に讓歩的な解決を與へ、首府をば突然カルカッタから、回教徒の中心たるデルヒーに遷して、恩威ならび行つて、イギリスの排斥運動を緩和せんとしたのであつた。然るに皇帝がデルヒーに滞在してゐた時、皇帝の大天幕が電燈の故障から火を失した珍事が起つたので、印度人はこれを以て不吉な前兆だと云つて祝杯をあげ、ある易者はイギリスの滅亡の期が迫つたのだ、と占つて獄に投ぜられた。

イギリス皇帝の即位式のあつた時には、ポースは今一人の叔父と共に逮捕の手を逃れて、アラウリの山間をさまよひ歩いてゐる時であつて、即位に對して何事かをなそうとする堅い決心も、嚴重なイギリス官憲の魔手にはどうする事も出来なかつた。即位がすんでから印度に起つた重大な出來事は、ことごとくポースの關係したり、指導したりする所で、さすらひのポースの生活、志士としてのポースの生活はこれから始る。

四、逮捕を逃れて放浪

ジェブルの街に突然、捕縛者が入り込んで、その陰謀の首領であつた叔父が捕はれて行つた夜、ボースは生き残つた他の一人の叔父と共に、拉致の手をのがれて落ちて行かねばならなかつた。ボースは早く両親に別れて、二人の叔父に監督されて育つたのであつたが、一人の叔父は早くも刑場の露と消えてしまひ、スパイと兵士は他の叔父とボースを捜すことが急であつた。

ボースは叔父に伴はれて家を出たのであつた。それはジェブルの町が淡紅の雲から洩れて来る黎明近い時であつた。二人は家に傳はる金銀寶石だけを一纏めにして、人目を忍んで祖父の代から住みなれた、なつかしいジェブルの町を後にしたのであつた。街路の両側にもつてゐるガスの灯は、此のあはれな放浪の旅人のかど出を、淋しく悲しむやうに見送つたのであつた。

二人は猛獸や毒蛇をさけながら、タールの砂漠がアラウリの岩山にならうとする、人なき淋しい所を、北へ北へと落ちて行つたのである。そして後にイギリスの皇帝の即位式が行はれたデルヒー市へたどりついたのであつた。

ボースは疲れきつた足を引きづつてゐた。そして荒廢したカシミヤ門の近くで、地上に腰をおろして憩つたのであつた。叔父は黙つてその門を感慨ふかい面持でながめてゐたが、やがてボースをかへり見て、この門の歴史を語るのであつた。ボースは初めて聞くこの物語りに、驚きと痛恨に、またしても少年の血が逆流するのを覺えたのであつた。それは『獨立の第一戦』のことであつた。

一八五七年の五月十日に、ベンガル州の土人兵が在印度のイギリス人に對して反旗を揚げた。それを聞くとデルヒーの附近に駐在する土人兵も、等しく赤旗を樹ててこれに呼應したのだ。その兵數は凡そ四萬人で、騎兵も砲兵も歩兵もあつた。そして多年の恨み重なるイギリス人を殺戮して、五ヶ月の間、このデルヒーの城に立てこもつて戦つてゐたのであつたが、イギリスの援兵は日に日に多くなつて來た。

イギリス兵の指揮官のアンソンは六頭軍神カールデヂの怒に觸れてコレラで斃れてしまつた。次でその任にあつたベルナアドも同じ運命に斃れてしまつた。しかしイギリス軍は新しい軍隊と新しい大砲で群がり來たのであつた。そしてニコルソン將軍が總指揮官になつて、このカシミヤ門で最後の

決戦を開いたのであつたが、時が至らなかつたため、是非なくもデルヒーは再びイギリスの兵隊の手に歸してしまつたのであつた。

この決戦の日は暑い日であつて、太陽神はこの侵入者を防ぐために、恐ろしい熱を放つたそう
で、侵入者が城壁に近づいた時は百七十度の暑さであつたといふ。

叔父からこの話を聞いた若いボースは、涙にうるんだ瞳をあげて、眩しく日輪を仰いで見るのであつた。そしてまた今更の如く、つくづくとカシミア門を見上げるのであつた。そこにはイギリスの國旗が翻がへつてゐて、イギリスから派遣された衛兵が、輕侮と凌辱の流し目をもつて、この旅人を見おろしてゐるのであつた。

ああジャムナ河の奔流に臨むデルヒーの町よ。そしてそれを取り巻く百二十呎の赤い砂岩の城壁も、印度の民を護ることが出来なかつたのか。熱風の下に翻めいてゐるイギリスの國旗は、印度人が何時までも自由を得てはならぬかの如く、誇らしげに立つてゐるではないか。孔雀の玉座の燦爛たる裝飾も、今はそれと僅かに昔日の面影を偲ぶさへ難いのであつた。正義の秤量器は古壁に懸つても、政治を見る時には、之に對した國王は既になく、今の統治者はこれを顧みようと

もせぬのである。若いボース君の決心は更に堅くなるのであつた。

五、修行者に身をやつして

やつと脱れて來たデルヒーの町も二人の肉親の旅人を安らかに睡らせることは出来なかつた。ここもイギリス政廳の迫害と追求は激しく、見るもの、聞くもの、ことごとく憤怒の種とならぬものはなかつた。ここに留ること百日ばかりだつたが、二人は再び引きかへして逃げのびねばならなかつた。彼等は再び懐かしいジェブルの故郷に歸つて來たが、この故郷もまた彼等をおかくしてはくれぬのであつた。若いボースをすら、見のがすまいとするスパイが、十人に一人はかくれてゐるのであつて、愛國者の血族はその故郷にも入れられないのである。

二人はまたジェブルを出て漂泊した。こんどは南へ落ちのびて行くのである。しばらくして彼等はアジメヤの町に着いたが、ここは昨年ジェブルの志士と聯絡して、石切場でミントー卿の暗殺を議した同志の故郷であるのだ。ジェブルの志士と共に印度の昔日を再現しやうとする人々の生地であり、また墳墓の地であるのだ。二人はその人に導かれて、志士の最後の地を訪れると

地の色さへも黒ずんで、吹く風もなまぐさい感じがせられる。二人はその地に立つて、殺された叔父のことや、同志を思うて涙をたれたのであつた。

魔のやうな政廳の厳しい搜索の眼は行く手に見張られてゐた。二人はこのアジメヤを落ちてマルワーへ行き、マルワーからアブーへ、アブーからアーメダバットへと、浮き草のやうに流れ流れて落ちて行くのであつた。そしてこのアーメダバットでポースは遂に、天にも地にも只一人の叔父と死別せねばならなかつたのである。

アーメダバットの晝の暑さは、土着の人々さへ辟易するほどの暑さであるが、夜になると急に大陸性の寒さに變るのである。太陽が没すると直ぐに夜冷がやつて来る。その夜氣にうたれるとややもすると怖るべき熱病にかかるのである。ジエブル町の二人は、こんな悪い氣候だとは思はなかつたので、つい不用心であつたのがもとで、叔父は重い熱病に倒れてしまつた。人目を厭ふ落人である、醫藥にも十分に親しむことが出来なかつた。ポースは瀕死の叔父を看護して森蔭に横たはらしてゐると、數へきれぬ鸚鵡がポースの言葉を真似たり、氣輕な尾長猿が近くを往來し滑稽な身振りをするのであつた。ポースはそこで假小屋を建て、叔父を看護してゐたが、遂に朽

木の倒れるやうに、叔父はなくなつてしまつた。人間と生れてこの悲哀があるのである。杖とも柱とも頼んだ一人の、たつた一人の叔父は、今やこの世になき者である。樹間に唄ふ鸚鵡や尾長猿の方が、どんなにか人間よりも幸福であるかも知れぬと、ポースには思はれた。

叔父は死んで行つた。然し彼はそれがために屈するやうな意氣地なしではなかつた。二人の叔父の靈は彼を護つた。ポースは今や一人で千萬人と雖ども我れ行かん決心をして、敢然として身を愛國の運動に捧げようと決心したのであつた。

彼は叔父の墓標の前に座して冥想してゐる間に、金剛不壞の大念力を得たのであつた。それは丁度菩提樹下に於て悟りを得た釋迦の悟りであつた。彼は萬腔の決意をいだいて北上したのであつた。これから印度に起る大事件といふ大事件は、ことごとくポースの指導したり、自ら實行した事である。彼は印度の獨立運動の一大柱石となつたのである。而して至る處にその首領として仰がるるに至つたのである。

彼が北上して再びデルヒーの町に入つた時は、イギリス皇帝の即位も終り、ミントー卿の代りとして、ハーデンジ卿が新首都に入らうとするしばらく前であつた。ポースはその日をば待つて

るた。ボースは數萬の群集の中に身をまぎらしてゐたが、やがて數千の軍隊を率いてハーデンジ卿が堂々と街をねり歩く處を目がけて、爆弾をなげつけたのである。爆弾は直ちに從者の數人を倒したが、卿は幸か不幸か、肩に負傷しただけであつた。さあ大騒ぎだ。行列は直ちに中止せられて、官憲も兵士も血眼になつて犯人の搜索に向つた。直ちに犯人を捕へたものには六萬五千圓の懸賞を與へる旨が報ぜられた。然しボースは巧みに踪跡を晦まして、どこかに走つてしまつたのである。これ實に一九一二年の十二月のことである。

彼は修業者に身をやつして、一舉に遠くアラビヤ海岸に面するパロダの町へ走つてしまつたのである。印度三億の民の中の過半は無宿の屋外居住者で放浪者である。彼は之等の印度教、回教乃至はキリスト教徒の間を放浪して、遂にパロダに漂泊して來たのであつた。彼は敬虔な修行者として路上に蹲つて日を送り日を迎へてゐたが、彼は必然に風貌の自づと人と變らざるを得なかつたので、人々の巷語の中心となり興味をそそつてゐた。然し彼の半生は誰人にも知られなかつたのである。

この若い修行者はよくパロダ驛の附近に姿を現はし、その驛員の間にも疑問の行者として話さ

れてゐたが、その驛員の中に印度人の驛員がゐた。彼は無信仰者であると共に、黒い皮膚の下に紅い愛國の血が流れてゐる愛國者であつた。この驛員はこの地のパロダ大學の俊秀として聞えた者の一人であつたが、彼はこの修行者の如何なるかを早くも察したのであつた。

そもそもこのパロダ大學とは、パロダの國王パハラジャのサナジー・ラオー・ガイクトゥルといふ英才が、今から二十年ほど前に、たしか彼が第七回か第八回かの歐米視察から歸つた時に、世界に於て有名であつた、純金の砲車に純金の砲身の大砲二門、それに純金銀の四臺の彈藥車を、臣下の反對を退けて鑄つぶし、それをもつて一部は一千哩の鐵道を敷き、他の部分で、このパロダ大學や博物館や病院を作つたのである。鑄つぶされた二門の大砲四臺の彈藥車の金の重量は、一臺がみな二百八十封度あつたと傳へられてゐる。王の志はとても臣下の及ぶべくもないものであるに相違ないのである。

ボースはパロダ驛の待合室で夜を明かすことが屢々あるが、印度の心臓たるこのパロダこそ大事をなすべき處としてボースが隠れてゐたのであつた。ある朝、彼はこの驛の待合室を出て、美しい黎明の雲を見ながら、人通りのない並木の蔭を靜かに歩いて居た。彼はいろんなことを考へ

ながら歩いてゐると、數町へだたつた所にバロダ大學が巍然として聳えてゐるのであつた。寂とした夜明けの學堂の門前にたたづんだ彼は、やがて鋪石の上に、修行者の法にならつて座し、黙々としてこの大學を見てゐたのである。これこそ印度人によつて、印度に建てられた最高の學府であると、しげしげと五層の樓閣に見入つてゐたのである。

その時ふと彼の背を叩くものがあるので、ボースは落人の身の、ギョツとして後を振りかへつて見ると、見知り越しのバロダ驛の驛員であつた。やがて驛員はボースの前へ來て、修行者に對して禮拜する如き態度をなしつつ、胸中に燃えてゐる愛國の情を訴へ、ボースに向つて必ずや過去を秘めてゐる愛國者であらうと尋ねたのであつた。

ボースはこの驛員の洞察の前には、彼の素性をかくす事は出来なかつた。この修行者は過去を彼に語つてから、二人は動植物園の鐵柵に添ふて歩いて行つたのである。驛員は感慨無量な口吻で、この立派な道路、完全な水道、宏大な下水、これは英明なる國王マハラジャを載いてゐる印度の土人州の唯一の誇りである。然し肝心なものが缺けてゐる。それは物質的なものでなくて、精神的な或物が缺けてゐる。印度には支配者が無いといふ事だといつた。印度の民族は呪れてゐるのだと泣

いた。ボースはこの青年の言葉を聞くと、また心の中が熱しない譯には行かぬのであつた。二人はしつかりと手を固く握りあつてゐたのである。

氣がつくと太陽はその姿を全く現はしてをり、街上に眠つてゐた土人も起き出し、水牛の群はのろ／＼と歩いてゐた。子供達は早や赤裸體のまま走りまはつてゐるのである。行き來の土人の中には、このボースの姿を見て、慌ただしく禮拜する者もゐたのである。

この驛員に逢つてから、彼は間もなく、バロダ大學の學生として籍を連ねることになつた。彼は講堂に出る外は、決して戸外へ姿を現はすこともなく、研究室と圖書館に入り浸つてゐたのである。彼は此處で初めて、正規な學問といふものに觸れ出したのであつた。彼は知識に飢えてゐた。彼は海綿が水を吸ふやうに、むさぼり讀んだのであつた。彼は好んで歴史を讀んだ。東西古今の興亡の歴史を讀んだ。そして印度の昔を考へては、今日の印度に涙をたれ、往古をして復活せしむる熱望が火のやうに燃えたのである。

晝も夜も、けぢめなく讀んだ。その中に彼は偉大なショックを受けたのであつた——それは同じアジアの東に横つてゐる小さな帝國である日本の歴史を繙いた時である。それは古い國である

が、しばらく前までは國家の形式さへ整はぬ國であつたのに、數十年前に始めて國を開いて、めきめきと發達して、十年前に、四百年前から嘗て有色人種に破れた事のない白人種のロシアを見事に撃ち破つた、大なる奇蹟であつた。

彼はこの奇蹟を解くために、その學術、政治、産業、藝術を研究した。そしてその宗教を研究した時、それは自分の國の佛陀の教が傳はつて、それが國家の基礎をなしてゐることを知つたのだ。彼の心は顫へたのであつた。何だかビーンと胸に高く響くものがあつた。彼は突然、机を叩いて立ちあがつた。そして叫んだ――

『日本だ！ 日本だ――印度の新精神は日本に甦つてゐる、日本との提携だ。』

それから間もなく、このパロダ大學の學監が一封の書き置きを受けとつたのであつた。それはボース君が――ヴァジャと名乗つてゐた修行者であつた彼、修行者から熱心な學生となつた彼が日本へ行くとの書き置きであつたのである。

六、獨立陰謀のリーダーとして

彼は日本へ行くためにボンベイから船に乗つたのであるが、船を待つ間をばマラバル丘から市街を見おろしてゐたのである。

三百呎を抜いてゐる高い時計臺が、街からぐつと抜き出て、その頂上にはイギリスの國旗が潮風にはためいてゐるではないか。そこにはフランス式の大講堂があり、ゴシック建築の政廳があり、更に世界の三大停車場の一つと云はれてゐるピクトリア・ステーションや、高等法院や議事堂が、眼を驚かす宏壯さで、眼の下にゴタゴタ並んでゐるのである。彼はそれらを見おろしてゐると、何とも云へぬ感慨にうたれるのである。更に目を遠く郊外へやると、そこには大きな紡績工場の屋根が畑の畝のやうに行儀よく並んでゐるではないか。

ボースの胸は冷たく悲しかった。これらの美しい建物は、美しい詩のやうな町は、印度の誇りではないのだ、それは印度の屈辱の記念碑ではないか、實に萬感こもこも湧いて來て、胸は冷たいのである。このボンベイの街は、今を去る二百五十年前に時のイギリス國王チャール二世が、ブラガンザのサヤリザリンと結婚した時に、ポルトガルの國王が引き出ものとして、送つたものであつた。その當時は見る影もない一漁村に外ならなかつたのが、今ではカルカッタを凌ぐ大都

會になつてゐるのである。これは實に、イギリスの植民政策の成功のシンボルに外ならぬのである。

數時間の後、彼はボンベイ灣に浮んだ汽船の甲板に立つてゐた。波止場から離れて行く甲板の上から、先刻まで立つてゐたマラバルの丘をながめると、その丘にはベルシャ人の作つた五つの葬儀塔が高く聳えてゐる。そしてその塔には時々、黒い無数の班點が塔の頂上から飛び立つたり、集つたりしてゐるのが見える。それは死屍を喰つて生きてゐる印度鷲の姿である。今日も誰か葬られたのであらうか。時は人を生かしたり殺したりする、かくて時は過ぎて行くのであるが印度の獨立はいつであらうか。

顧みれば、故郷のジエブルを漂泊ひ出てから、幾年も宿なき羊の如く、遙けくもカルカッタまで迷ひ來たのである。彼は今や印度を去らうとするのである。彼は別れにのぞんで、今一度、祖國の精神文化の中樞的發祥地の雪山の大光景に接したかつた。ジエブルの高原から地平かすかに見えざる如き雪山ではなしに、しみじみと雪山の懷に抱かれて見たかつた。そんな思ひにとらはれて、彼は船から下り、カルカッタの旅館に數日を過して後、シルダ驛から汽車に搭じて、カル

カッタの北の山上都市のダージリンへ向つたのである。百二十哩をガンヂス河の右岸まで、ベンガルの沃野を日夜を間はす走り通し、ダムクヂアの渡船驛から對岸のサラガツリまで十三哩、それからシリジリまで七十五哩、そしてダージリンまで五十哩だ。

山上都市のダージリン、そこに滞在してゐた週日の印象は、ボースにとつては永久に忘れ難きものの一つであつた。東の空が仄かに紅りに染むる頃、黄金を湛えたやうな太陽の出現する前、落日の中空まで血潮を流したやうに雲を焼く際、煌々たる明月が山の上に照り、隅なく山の裝を照らす時、或る時は小禽の聲に、或時は溪河の響に、——彼は飽きもせずヒマラヤの連山を眺め耽つたのである。

海拔二萬九千二呎のエベレスト峯、二萬八千五百五十六呎のキンチンジャン峯、その西の二萬四千十五呎のカプルー峯、二萬五千三百四呎のジャンヌー峯、その東の二萬二千七十七呎のバンジム峯、遙か東に二萬二千二百七十呎のシモルチン峯が、目の前に天を摩して聳えてゐて、それが白銀の萬古の雪を頂いて輝いてゐるのである。壯嚴と云つてよいか、崇高と云つてよいか、飽かぬ眺めである。疊々と相ひ重なる大ヒマラヤ、無限の感に打たれ、今更に人類の弱小を考へつつ

氷雪を涉り来る冷風に送られて彼はカルカッタに歸つて來たのである。

さて週日をこの宗教の都に送つて歸つて來て見ると、地上の風雲は變つてゐるのであつた。彼が雪山から歸ると直ぐにラホールで學生が爆彈を投じて、學生が四名死刑に處せられた旨の報道があつた。ボースはこの愛國者の報道を聞くと共に、また日本へ去るのが國士として取るべき道でないやうに感ぜられたのであつた。彼はこの懷疑心を抱きつつ、カルカッタの旅館に横臥してゐた時、はしなくも歐洲大戰の幕は切つて落されたのである。即ち一九一四年の四月にボスニヤでオーストリアの皇太子夫妻が、セルビヤの青年のために暗殺されたのを幕開きに、世界が大亂の渦中に投じたのである。

ボースは決心を眉の間に示して立ちあがつた。今こそ全印度が一齊に立つべき時である。この歐洲戦争を措いては機會は永久に來ない。そして彼は惶惶として爆彈事件のあつたラホールへ急行したのである。

これより先、アメリカの桑港にある『印度革命本部』からは、盛に秘密のパンフレットを印刷して、嚴重なる官憲の目を潜つて、巧みに印度に送付して、青年の間に革命思想を鼓吹してゐた行したのである。

その『印度革命本部』は革命黨主領ハル・ダヤルの創設にかかゝるものであつて、遙かにアメリカから印度の獨立を指導せんとしてゐたものである。而して大戰の勃發と同時に、同黨に屬する印度の志士は、宿願成就の機が至れりとして、陸續としてカナダや支那から本國に密航して、祖國の同志と凝議したのである。

ボースはラホールに來て、前バンジャブ大學の教授バハイ・バルマ・ナンドや、シーク教徒中の利けるたるカルター・スイングや、ギシュヌ・ガネーシユ・ピングレーやサツチンドラ・ナート・サニヤルと共に計つて、軍隊や學生の誘致に力めたのである。

秘かにスバイの目をくゞつて『革命の檄文』が配られた。それには五六百の志士が獨立の革命を起すために、既にアメリカから歸つて來てをり、尙ほ續々として歸つて來つつある。革命運動が成就したならば、學生は立派な官吏として採用されやう。革命後にはハル・ダヤルが新興印度の國王になる筈で、革命黨の首領が飛行機に搭乗して、外國から歸來すると共に、一齊に革命の暴動を起すと書いてあつたのである。

最も彼等がその秘密運動の中で、力を入れたのは印度兵の誘致で、革命の檄文は複寫され、ま

た複寫されて軍隊内に配布され、また或る志士は募兵に應じて軍隊内に入り込んだのである。或は血縁ある庸兵に接近して叛亂を勧め、かくてラホールの騎兵第二、第三聯隊は、一九一四年の十一月の二十七日を期して、一隊はミアン・ミールの武器庫を襲ふて武器を奪取し、一隊はジャール・サヒブに急進して、革命黨の率ひてゐる農民軍の一團と合し、ここに最初の旗上げをする筈であつたが、またしても憎むべきスパイ、永久に呪はるべきスパイのために、早くもイギリスの士官が警戒するところとなつたので、一旦中止の止むなきに至つた。

ここに於てか翌一九一五年の二月十九日の夜半、ラツバの合圖と共に、同聯隊は突如起つて隣接の砲兵聯隊を襲ふて、悉く聯隊内のイギリスの士官を屠らうとし、早くから氣脈を通じてゐたバンジャブ歩兵第二十六聯隊も、同日の同刻に革命黨の一團と内外呼應してフェロズプールの武器庫を襲ふべき手筈を定めてゐたが、まさに革命の烽火のあがらんとする間に、同じくスパイの密告によつて計畫が發覺して、失敗に終つてしまつた。それでその後、騎兵二十三聯隊では、更に再起の計畫をなし、先づスパイの疑ある者を物色して之を血祭にあげ、且つ密かに爆彈を製造して、イギリスの士官を壓殺せんとしたのであるが、不幸にも爆彈が爆發して、またもや陰謀

が發覺し、多くの逮捕者を出し、特別法廷が開かるるに至つた。この時逮捕された者が總數四千人に達し、その中、七百人が有罪を宣告せられた。これは今まで印度に起つた最も大きな陰謀事件として記憶されてゐる、有名なラホール事件である。この事は世界の耳目を聳動したもので、アメリカの新聞の如きは、絞殺四百人、終身懲役八百人、監禁追放一萬人と報道した程である。この陰謀が暴露すると共に幹部は、ボースとサニヤルとを除いて、他はことごとく捕縛されたのであるが、兩氏の捕縛を免かれたのは真に天祐的であつた。この時サニヤルはベナーレスに行つて、その秘密結社の連中がラホールの暴動と策應するように準備してゐて、うまい工合に留守であつたのであるが、ボースは何だか家のまはりの様子が妙に變に氣に掛つて、日が暮れると同時に、こつそり石の塀を乗り越へて、親しくしてゐた隣の家へ泊めてもらつたのである。すると、その留守の間にボース等の秘密本部は、イギリスの庸兵に包圍されて、全員が捕縛されて行つたのであつた。實に間髪を入れざる危ないことであつた。このラホール事件は直ぐに第二ラホール事件を起し、二百五十人の逮捕を見、八十餘人の有罪者を出した。次で小陰謀があちらでもこちらでも勃發し、ラホールを中心としたバンジャブ地方は、蜂の巢をつついたやうに亂れたの

である。六月十二日には運河畔で巡視兵が暗殺されたが、これはラホール事件の逮捕に對する報復であつた。

からうじて身を以て逃れたボースは、巧みに變装して長驅東に走つて、思ひ出のなつかしいデルヒーの町を通つて、遠くガンヂス河の中流にあるベナーレス町に逃走し去つたのである。ベナーレスには青年の有力な秘密結社があつて、皆々岩のやうな大決心をもつて、ラホールの失敗を挽回しやうとしてゐたのである。彼等はあらゆる手段を用ひて武器や彈藥を集めることや、爆彈を製造することや、軍隊に革命文書を配付することに努めて、一生懸命に烽火の準備に忙がしかつたのである。そこへひよつこりとボースが現はれて來たのである。サニヤルは彼に「生きてゐたか」と抱き付いて男泣きに泣いたのであつた。彼等の間に鬼才のボースが加つてくれたのは、百萬の味方の様に思はれたのであつた。サニヤルは全團を率ひてボースの指導にまかせてゐたのであるが、計らずも爆彈が破裂して、陰謀はまたもや暴露し、時を移さず踏み込んで來た警官のためサニヤルの外、有力な幹部が全部逮捕され、二百人の有罪者を見るに至つた。この時の爆彈の破裂によつて、ボースは手に負傷をして指が二本ぶらぶらになつてしまつたのである。今でも

彼の左手の指が曲つたままになつてゐるのである。

この時も運よくボースは、身を以て逃れたのであつて、イギリスの官憲は再び齒がみをして、この「お尋ね者」を逃がしたことを口惜しがり、イギリスの新聞は爆彈で彼が死ななかつたのは残念至極だと書いたのである。ボースの首に對する懸賞金は更に増されて五萬圓になつたが、彼はそのまま印度には遂に姿を見せなかつたのである。

七、日本へ逃亡

ラホール事件、ベナーレス事件の首領として最も重大視されてゐたボース——現印度の武斷的獨立派の最首領が行衛不明になつたのである。草を分けてもさがそうと云ふ、イギリス官憲の搜索は嚴重である。今では彼ははどうしても印度には居ることが出来なくなつた。そこで彼は再び日本へ渡らうとしてカルカッタへ姿を現はし、いよいよ日本を指して亡命の人となつたのである。カルカッタを出發した時は、曉の朝まだ早い時であつた。彼はガンヂスとフーグリーの兩河から滔々として吐き出す濁流の中を、淺瀬を避けて行く汽船の甲板に立つて、陸の見えなくなるまで

見送るのであつた。空には南十字星が爛々と輝いてゐた。

『さようなら印度よ、希くば健かに』

彼の目の前にはジェブルの幼き時代のこと、デルヒーの街のこと、ラホルルのこと、ペナールスのこと、バロダ大學のこと、ヒマラヤ連峯のこと、それらの思ひ出や聯想が、走馬燈のやうに浮ぶのであつた。——さようなら印度よ、竹馬の友よ、同志よ。亡命して行く彼の男の目には、流石に熱い涙があふれてゐた。

八、シンガポールの悲哀

船はシンガポールを指して行く。然し彼にとつてはシンガポールは悦しからざる記憶の土地である。彼が憧憬の日本に對して、初めての幻滅を感じた土地である。若し彼は落人の身でなく、更に逃るべき良き土地があつたら、日本以外の地を選んだであらうほど、シンガポールは日本に對する憧憬の裏切られた土地である。

その裏切られた事件といふのは、シンガポールの印度兵反亂に對する、日本の鎮壓であつた。

——一九一五年の一月、即ちボース等がラホルルの陰謀を着々として歩を進めてゐた時、シンガポール駐屯の印度軍隊が、ボース等の誘致に應じて、早くも蹶起して、獨立の旗をあげたのであつた。

夜半に突然鳴り響くラツパの聲と共に、アレキサンダー兵舎に居た輕歩兵七百名は、俄かに起つて革命の烽火をあげ、彈藥庫と糧食庫を占領し、竹藪を突破して深夜、ブキテマロードのヤング總督邸に迫つたのである。かくてシンガポールは物の見事に彼等の手に歸さうとしたのであつた。ここに於てか海峡植民地政府は大に驚いて、無線電話を利用して各國艦隊並びに各國の領事に救援を依頼したのであつた。

これより先き、暴動が起きると同時に、シンガポールに停泊してゐた、日本の二艘の軍艦は、救援を要求されるのを豫知して、いち早く港外へ飛び出して、中立の態度を採つてゐようとしたのであつた。然るにイギリスの電報を受けたフランス軍は、翌日早速ジョンストンピア棧橋に上陸し、折からの猛雨を衝いて印度軍に向つたが、鋭鋒に敵せず、散々な目にあつて敗北してしまつたのである。

フランス軍を打ち破つた印度兵は、意氣更に天を衝くものがあつた。やがてロシアの艦隊も來援し、英、佛、露の海陸聯合軍が組織されて、一齊にアレキサンダーの兵營に向つて總攻撃を行つたが、印度の革命軍は却つて勢の天に冲するものがあつた。——彼等は既にトルコの軍艦に對して聯盟を約してゐたので、ただその來援を待ちに待つてゐるばかりであつたのだ。

このシンガポール騒動の中心は、コロンの志士グダ・アルバシアンといふ、齡は早や七十三歳の老人で、老後の思ひ出に巨萬の富を犠牲にして敢然と此事に當つたので、これを助けたのはシンガポールの女皇街クワンヤウに宏壯な邸宅をかまへてをり、資産が一億と稱せられてゐる某氏で、某氏の父は當時之も劣らぬ七十歳といふ高齢で、グダ・アルバシアの親友であつたのだ。

グダ・アルバシアンは極端な親日論者であつて、彼は輕歩兵の幹部に、少くとも日本軍艦の碇泊せざる時に事を擧ぐべく、而して事のならざる時は必ず日章旗の下に降れ、必ず日本軍は叛兵を保護して、次の準備に對する機會を與へてくれるであらうと告げてゐたのである。

然るに、ああ！ 叛亂は日本軍艦碇泊時に起きて、日本軍艦の好意ある港外出發に係らず、イギリスの御氣嫌を恐るる我領事館は、早速に外務省に之を請訓し、外務省は折り返し軍艦に對し

てイギリスの援助を命じたのであつた。咄、何といふことだ。

——印度の叛兵は、不安と希望の中にトルコ軍艦の來援を待つてゐたのであつた。彼等は朝の光の照り初める頃、水平線上遙かに二隻の軍艦が馳せて來るのを見た。トルコ軍艦來る、トルコの援兵來ると、印度の軍隊はどよめき悦んだのであつた。然しその悦びはつかの間に過ぎなかつた。ああ二隻の軍艦とは外務省の命令によつて、引きかへさねばならなかつた日本の軍艦であつたのだ。日章旗のひるがへるを見ては、彼等は落膽せざるを得なかつたのである。

日本の領事が組織せる百八十名の在留邦人の義勇軍と、××大尉指揮の下に二艦より上陸せる陸戰隊とは、アレキサンダー兵營に向つたのである。萬事は終つたのである。日本軍の出現に印度兵は全く落膽の淵に落されてしまつた。『自國をしてその文明を開發し、その光榮ある古へに復らしむることは日本によるの外途なし』と信じきつてゐた日本が、却て彼等の兵營に向つて來たのであつた。

印度兵はこれを見て相抱いて泣いたのであつた。而して記憶せねばならぬことには、ああ悲しくも記憶せねばならぬことには、印度の叛兵は、日本軍に只の一發の彈丸も送らずして、グダ・

アルバシアを先頭にして、隊伍正しく整列して、軍門に降を乞ふたのである。

この老いたる有色人種同盟論者は、沈痛限りなき面持で××大尉と相對した。白髯が風に揺いでゐた。大尉の面には何とも云へぬ悲しさがあつたのだ。——僕といふこの筆者はこの事をここに書きつつ、涙をたれてゐるのだ。若し讀者にして僕のこの原稿を見るならば、涙で點々として文字がよごれてゐるのを見てくれるだらう。僕は男泣きに泣いてゐるのだ。そしてこの事を讀者に訴へようとしてゐるのだ。

グダ・アルバシア老の豫期にも反して、印度兵はわが軍隊によつてイギリスの官憲に引きわたされたのだ。——ああ僕達はどうして印度の國民に對して顔向けがなり得ようか、ああ日本よ！日本よ！ 裏切者の日本よと涙がこぼれるのだ、恥かしくて仕方がないのだ。

イギリスの官憲に引き渡された彼等はシンガポール監獄の、合歡木の並木を前にして毎日午後五時を期として、裁判が續けられ、グダ・アルバシアン以下、三百餘名が銃殺され、殘餘は遠島と懲役に處せられたのである。

ボースにはこの苦い思ひ出が、新に胸に甦つて來るのであつた。この苦き思ひ出のシンガポー

ルに彼が初めて着いた時、彼はまた二度目の日本に對する幻滅を見たのであつた。——彼はパロダ大學から夢みてゐた日本人の群を初めて見た、——然しそれはボースが待ちに待つてゐた日本人ではなかつた。それは頬の紅な、髪の黒い長崎の女の群であつた。彼は日本の娘に迎へられて、日本のために泣かざるを得なかつたのであつた。

上海までの航海は自由であつたが、さて旅券のないボースは、どうして日本へ入らうかと、その機をねらつてゐたのであつたが、ボースの逮捕の命令は上海にまで來てゐて、彼はそこでまた危くも捕はれんとしたのであるが、どうにかこうにかして逃れて、なるが儘になれと、日本行の汽船にのり込んだのであつた。

その時、同じ汽船に乗つてゐた日本の青年が、ボースを見て印度人と見てとつて、しきりに面白く印度の美術のことに就て語り始めたのであつた。彼は日本の新聞が報ずる處によると、詩人のタゴール翁が日本へ來るといふが本當か、などと尋ねたりしたのであつた。この青年の話聞いてゐる中に、ボースの胸にはある奇計が湧き出たのであつた。そして船が神戸へ著いた時、検査官がどやどや船に入つて來た時、ボースは落ちつき拂つて、タゴールに似た發音で「タクール」

と自らを名乗つたのである。すると官吏等は俄かに尊敬の意を表して、「おおタゴールさんですか」と握手を求めたのであつた。かくてまんまとタゴールはタゴールになりすませて、旅券も何も見せないで大手を振つて神戸へ入つてしまつたのであつた。それは一九一六年、即ち大正五年の五月のことであつた。

九、退去命令

彼は大手をふつて東京驛へおりた。希望にみちた日本の帝都の玄關に立つた。そして錦繪で見た二重橋の風景にふれて、何とも云へぬ緊張を感じるのであつた。

ビー・エヌ・タクール——そう彼は變名して押し通してゐた。然し彼の熱情と意氣と理想は、忽ちにして日本の志士の間に知れ渡つた。彼は頭山満翁や、内田良平や葛生能久や大川周明などいふ、熱烈なるアジア主義の志士と交はるやうになり、また有力なる政治家の知るところとなつた。

彼は公然と日本の政治家を訪ね、志士と交つて日本の政府を動かさうと勉めた——まだ歐洲戦

争はたけなはである。彼は不動經を口ずさんで日本の民衆を動かし、新聞記者を動かし、輿論を動かし、政府を動かして、この大戦中に日英同盟を破壊させて、日本の助力によつて印度を獨立せしめようと、金剛不壞の大念力を傾倒したのであつた。わけても黒龍會の葛生能久とは、肝膽相ひ照らして兄弟の義を結ぶに至つた。

大川周明のところには、その時印度の志士ヘランバ・エル・グブタが隠れてをり、久保田と名乗つてゐたが、このグブタと共にポースのタクールはたちまちにして、印度獨立の日本支部たるかの觀を呈した。上野の廣小路にバナナを賣つてゐるポビイも、印度獨立運動に暴力を使用しようとした一人であつた。彼も集つた。また後になつて正體の何者か分らなくなり、日比谷公園で印度のバクシになぐられて、聲をはりあげて泣いたシャストリーも來た。

ポースの運動は餘りに華々しかった。餘りに公然であつた。忽ち亡命の志士の名をかたつてゐるスパイのムズムダルが、之をイギリスの大使館へ報告したのであつた。——おおラホール事件のポース！、イギリスの大使館は愕然として驚いたのである。彼を日本に置いては、どんな恐ろしい陰謀を企てるかも知れぬ。一刻も早く日本を退去させて逮捕してしまはねばならぬ、そう

大使は考へてスパイの報告と共に自動車を外務省に飛ばして、當時の外相石井菊次郎に嚴談してタクールとグブタは獨探であり、且つ印度の危険人物であるから、即刻に日本を退去させてもらいたいと要求したのである。——印度のスパイはボースの前に、欺いて熱烈なる印度の志士たることを示し、遂にボースの左の手がベナレス陰謀の時、爆弾のために傷いた手から、タクルのボースたることを尋ね、泣いて彼に訴へて彼の本名を知つたのであつた。スパイ、スパイ、永遠に人類の幸福のために呪はるべきはスパイである。

イギリスの大使が石井外相を訪ねたその日、石井外相は當時警視總監の西久保弘道をまねいて、ボース等を退去せしめることを命じたのであつた。それは大正五年の十一月二十七日のことである。

その夜ボースは麻布の筭町の陰れ家に、グブタと共に、初めて迎へる冬の寒さにふるへてゐたのである。彼等は冬といふものを全く知らぬ國に生れたので、とりわけ初めての冬近い夜の底冷えはたへられぬものであつた。ストーブに石炭を赤々とくべてゐる時、玄關のベルをけたたましく鳴らして、警官が入つて来て、書面を手渡したのであつた。それによると翌朝の九時に兩人共に

高輪警察へ出頭せよといふのであつた。

霜柱を踏んで二人は朝の風にふるへながら高輪警察へ出頭すると、西久保警視總監の命令によつて、向ふ一週間、即ち十二月二日限り、横濱から退去せよと云ふ通達だ。萬事休す——二人とも寝耳に水のやうに驚かされたのである。日本よ！日本よ！頼みとして逃れ来た日本も、この二人の身體を入れてくれるには狭いのであらうか、亡命の志士と生れて、日本も安住の地でないのかと、二人の血は筑波風に凍るのではないかと驚かされた。彼は直ぐに黒龍會を訪ねて、この事情を葛生に話したので、葛生は大に驚いて、早速これを内田良平に話し、直ぐに頭山満翁の出馬を乞ふことになり、國士はグブタとボースの退去命令の解除運動に八方に飛んだ。

このことを聞き傳へた、ボースの親しくしてゐる新聞記者も、續々として、頭山邸に押しかけて新聞紙上に歩調を合せて、二氏のために力説つとめるところがあつた。その時、ボースは新聞記者に對して、

「私は今度日本政府から、計らず退去命令を受けたのが遺憾にたへない。由來私は日本の如き東洋の先覺國に多大の期待を持つて、參つたのであつたが、事がここに至つてみれば仕方のない

ことである。貴國の政府が私に退去命令を與へ、私を迫害しやうとしても、私は日本の民衆が私に對して與へてくれた親切には、心の底から感謝をしてゐる。思ふに私を退去させたのはイギリスの大使の運動にあるは論ずるまでもないことで、イギリスの國是は日本と他の東洋諸國との關係を阻害するにありますから、私のやうなものが御國に居ては都合が悪いからです。私を退去させるのは政府の勝手ではありますが、然し政府が私達に對してとつた今度の行爲は、印度三億の民が日本に對する心持に重大なる影響を及ぼすことを忘れて下さい。また今後、私の様な人間が再び亡命して來るかも知れませぬが、このことに對してイギリスの宣傳に乗らないやうに日本の人に御注意を申して置きます』

そう彼は語つて、憮然たるものがあつたのである。運動員は、表面交渉に犬養毅を推して、石井外相を訪はしたのである。犬養は

『政府は彼等印度人をば獨探となしてゐるけれども、自分等は決してそうであると思つてゐない。彼等は獨立の志士であるが、決して獨探ではない、獨探といふのはイギリスの口實に過ぎないのだ。恐らく石井君自身も政府も、よもや彼を獨探とは認めまいが、——事實はイギリスから

頼まれたに相違あるまい。一體政治犯のために亡命して來てゐる者は、どこの政府でも保護するのが當然で、これを國外に放逐するといふのは、日本の主權の存在をイギリスによつて左右せられることになつて、日本の大恥辱である。故に政府としてはこの際、斷じて退去命令を取消すか、或は弱者をして強いて死地に陥れるやうな劣策をとらず、多少亡命の餘地を與へられたい』

と頼んでみたが、眼中にイギリスあつて日本なき石井は、頑として應ぜず、

『政府として一旦命令を出した以上は、是が非でもこれを取消す譯にはゆかぬ。たとへ彼等が獨探でなくとも、同盟國たるイギリスにとつて悪い者である以上、それを日本に置くは日本とイギリスの感情を阻害する事になり、結局日本にゐてくれるは日本の害になる人だから、必ず十二月の二日には立つてもらはねばならぬ』

と國家權力といふ虎の威を借つて、狐の如く狡猾な辯を弄して、頑として應じないのである。それで更に床次竹次郎や、岡崎邦輔も運動して石井を説いて見たけれども、やつぱり駄目であつた。犬養は更に花井衆議院副議長を動かし、石井と再見し、佐々木安五郎をして三浦觀樹將軍を説かしめ、更に歸路、寺尾享博士とも相談をして、八方に運動の手を擴げたが石井は頑迷にもど

うしても動かうとは云はぬのである。

かくてこの問題は政治問題と化し、政友會と國民黨は合同して、議會の劈頭に質問を發することになつた。然し退去命令は議會の開會まで待つてをらぬ。時間は容赦なく過ぎて行くのである。志士は火のやうに怒つて運動してゐるが、外務當局は動かうとはせぬのである。石井は自分の權力の偉大なのに、誇らしげに人々を冷かに窓から見おろしてゐるのみであつた。

退去の日はあと二日に迫つた。然るに二日に横濱を出帆する船は、香港行きか、上海行きよりはなく、當然に死刑への旅である。死の海への船出である。周圍の人々は心配に夜も眠らなかつた。これに同情してゐた當時の農商務大臣の河野廣中が、同僚である石井菊次郎に

『若し印度人の身代りになれるなら、僕を殺して印度人を二人共助けてくれ』

と云つた、然し石井は冷然として葉巻をくゆらせてゐるばかりであつた。

志士は香港や上海へ彼等をやることは出来ぬ、せめて亡命の餘裕のあるアメリカへでも逃したいからとて、十日間の退去延期を乞ふたのであつたが、外相は依然として聞き入れず、明かに印度人をばイギリスの官憲に引き渡して殺すことに愉快を感じてゐるらしく見えた。

志士等は更に警視總監の西久保弘道を訪ふて、印度人が獨探でないから、逃してくれまいかと頼んだが、西久保も同じく

『二日午前十時に横濱を出る船がある。それに乗るべき必要上、二日の午前七時までに東京を出發せよ、然らざれば手錠をはめて、強制執行をするばかりだ』

と空うそぶいてゐる許りである。委員は帝國ホテルに引きかへして來た。杉山茂丸や内田良平や佃信夫や、美和作太郎が、額を合せて相談してゐるけれど、どうにも策のほどこしやうがなかつた。——『下劑をのませて病氣にしよう、まさか病人をいくら警視廳も引き立てる事は出来ぬだらう』そんなことをまで語りあつた。そこへボースとグプタとが自動車で帝國ホテルへやつて來た。それで早速このことを話ると

『下劑まで飲んで假病を使ふことはよしませう。諸君等が盡して下さつた御同情と御厚意は厚く忘れませぬ。この上は甘んじて捕はれて死んで行くまでです』

と覺悟の敢然たるものがある。この覺悟を見るにつけても、志士等は涙の種であつた。助けてやりたいがどうにもならぬのである。政府のイギリスに對する腰拔をば、多勢が集つても何とも

することが出来ぬのである。運命は刻々に迫つて行く。

黙つてゐる頭山翁までが、すつかり匙をなげてしまつた。そして『石井の首と交換するより外はない』と微笑したのみであつた。そして柔道家の血氣鬱勃たる宮川一貫が、堅く頭山翁の言葉に感激して、若し印度人が捕縛されて船に乗せられると同時に、一身を犠牲にして石井外相を暗殺することに決したのである。志士等は石井外相を暗殺することによつて、印度三億の民に日本國民の志を知らしめ、以て日本として世界に謝罪せんとしたのであつた。危きかな石井外相よ、時機は刻々に迫つて行く。

十、義人の出現

志士の擁護運動と新聞紙の石井攻撃は、日に烈しくなつて行く。

この喧ましい新聞の記事を読んで、どうにかして助けられないものかな、どうかして助けてあげたいものだ、祕かに心配してゐた人があつた。

それは新宿の電車の終點にある、大きな中村屋といふバン屋の主人だ。彼のおかみさんは有名

な相馬黒光女史といつて、藝術家のバトロンになつたり、ロシアの亡命客のエロシエンコを保護したりしてゐた婦人であるが、その夫たる愛藏氏も似た者夫婦で、同じ變り者であつた。中村屋のうしろに、今でも小さな洋館があつて、そこには嘗て天才彫刻家の、萩原守衛が住んで、黒光女史の保護の下に、彫刻を作つてゐた所で、後にそこへは現今の帝展洋畫の審査員の、中村舜が住んでゐた所である。下が物置きになつてゐて、二階が六疊の部屋で、便所や流しが別についてゐるのであつた。

相馬さんは新聞の記事を読みながら『あゝ氣の毒なものだ、どうにかして助けられないものかな、どうかして助けたいかと考へて、ふと何氣なく頭をあげて店先をみると、ボースの救助に東西に奔走してゐる筈の中村弼が、ひよつくりと店先へバンを買ひに入つて來たのが見つかつたのである。

中村弼は、法學博士の中村進午の令兄で、植物協會の會長をしてゐる國士であつて、新宿の終點の近くの大久保に住んでゐる所から、變り者の中村バン屋の主人とは親しくして居り、時々紙幣などをくづしに來る人である。

相馬さんはこの中村弼の顔を見ると、頭にある閃めきが来た。——そうだ俺なら助けて隠せるだらう、この場合に俺より外に、あの印度人を助け得る者はないのだ。

そう考へると、彼は下駄をはかず、店へ飛び出して中村弼をちよつと店の片隅へ引つばつて行つて

『此度は印度人の追放のことを、心から同情してゐますが、何とも方法がありませんか』

『いやそれで困つてゐるのだ。八方に運動して手を盡すけれども、どうにも策のほどこしやうがない、惜しい人間を二人まで殺すのです、日本の政府の腰弱には實に憤慨にたへない』

そう中村弼は答へた。すると中村屋の主人は更に一段と聲を落して、

『實は色々有力なお方が運動なさつておいでなのであるから、私共が嘴を容れる限りではありませんが、何だか私ならばお隠し出来るやうな氣がするのです。何だかそんな氣がするのです。大隱は市巷に隠るとか申しますが、私の家の奥には、彫刻家の萩原や中村^{つひ}のゐる所がありますから、そこへ隠したら隠せるかと思ふのです。失敗するかも知れませぬが、何だかそんな氣持がするのです。若し何でしたら、及ばずながらおかくまい申しませうか』

意外の言葉に中村弼は、穴の開くやうに、じつとこのバン屋の主人の顔をみた。そしてしばらく目をつぶつた後、

『御手段がありますか——出来ることなら御願ひ申す、早速頭山翁に相談をするから』

と、それからバン屋の主人の耳うちを聞いて、何事かをうなづいて中村は早速、帝國ホテルに走せつたのであつた。

帝國ホテルでは中村弼の話を聞いただけで、誰もバン屋の主人ではね、それにドンナ人物か、よく素性もわからぬではないかと、眞面目に聞いてくれぬのであつた。そして相ひ變らずの小田原評定に、時刻が益々移つて行つた。その時、尾崎紅葉の小説の荒尾讓介のモデルと云はれてゐる佃信夫が入つて来たので、中村弼は『どうだらう新宿の終點のバン屋の主人が……』と彼のことを話すと、佃は皆に『中村屋の主人なら、俺は柏木でよく知つてゐる。彼は非常な變りものだから、必ずやりとげてくれるだらう、今の場合にそうするより外に方法がない』

そう裏書をして賛成をしてくれたので、衆議は一決した。——それは實にボース等が追放されようといふ、前日のことであつたのだ。

話がかはつて、中村屋主人はその日の午後、上野の或る茶席で彼の關係してゐる會社の、株主會議があるので、それへ出席するため夫人に、行く先をつげず、黙つて一寸出てくるからと云つて、會議をやつてゐる所に出掛けて行つて、すっかりボースを助ける大事な使命を忘れてゐたのであつた。そして彼は株主會議がすんでから、——丁度それは午後の六時頃、——皆で飯を食つて、茶をのんで茶碗を下に置くと、

『忘れてゐた！』

顔色をさつと變へて、彼は立ちあがつた。そして早速家へ電話をかけたのだ。

『何か家に變りはないかね』

出て來たのが黒光女史だ

『何かつて、サツキから中村さんが來られて、八方へ電話をかけて捜してゐたのですよ』

『そうか早速かへるから』

と電話をきつて、友達には大事な急用で歸らねばならぬからと、直ぐに人力車を急がせて、家へ飛んで歸つたのであつた。中村弼は、相馬氏の姿をみるなり、

『直ぐに今から來てくれ、用意は出來てゐるから』

とそれから二人は連れ立つて、赤坂の靈南坂の頭山翁の屋敷へ行つたのであつた。

家の前にはボースとグブタとが乗つて來た自動車があり、その直ぐ後には、退去命令をさしつけたその日から、警視廳の高等刑事が尾行してゐる自動車が停つてゐた。

二人が門を入らうとすると、自動車の刑事共が、エヘン、エヘンと示威運動的にせきばらひをするのである。

中村屋の主人は今に見てをれ、鼻をあかしてくるからと、ニコニコしながら玄関を入つたのであつた。

中村屋の主人が家へ入るや『大正の天野屋義兵衛』などと云つて、誰も彼もが手を堅く握つてくれるのであつた。——彼はそこでこの憐れな運命の前に、泰然と動じない印度の二青年を見て喉が熱く團子でもつかえてゐるやうに感ぜぬ譯にはゆかなかつた。

二人の印度人は、どうぞよろしくと頭を下げる。黙つたゐた頭山翁も何分よろしく頼みますと挨拶をした。それから中村弼と相馬とは、また玄関から出て靈南坂の下へ出て、横丁へ曲つたの

であつた。——誰も尾行して来るものがないかと、気づかひながら前後左右を見渡すが、誰も来ない、そしてそこには、灯を消した自動車が一臺、闇の中に止つてゐるだけであつた。

この自動車は、當時東京で一番、快速力だと噂されてゐた、杉山茂丸の自動車で、その快速力を利用して、警視廳の自動車をまいてしまはうと云ふのであつた。

相馬と中村が頭山翁の玄關を出ると直ぐに、ボースとグブタとは、佃信夫と柔道家の宮川一貫とに助けられながら、跣足のままで頭山翁の庭から、隣の家を乗り越えて、その隣りの家の座敷を四人が、黙つて泥足のまま走りぬけて、闇の中に待つてゐる自動車の方へ飛んで行つたのであつた。ことの意外に隣りの家の者は、ただ驚いてゐるばかり。

「誰も尾けて来ないか」

「たい丈夫だ」

「新宿の終點の方へ」

車の後の灯を消して、カーテンを深くおろした怪しい自動車が、それから全速力で走つて行つてしまつた。

新宿の中村屋では、毎夜九時には店をしめる事になつてゐるので、その店のしめぎわには、必ず急に客が大急ぎで買ひに入り、非常に雑踏するのが常で、その夜も店の戸を半ばおろした店へは客が澤山入り込んでゐた。折よくそこへ、自動車は着いて、四人ともどやどやと店へ入つて、すつと二階へ通つてしまつたのであつた。

主人が客を三人も、然もまつ黒な體の大きな異國人を二人も連れて二階へ通つたことをば、店の十四人の店員が一人も氣がつかかなかつた。嘘のやうな話だが、全く誰にも氣がつかかなかつたのであつた。

やがて三人を二階へ入れると、印度人は黙つて堅くなつたきりである。これを見ると中村屋の主人たる相馬氏は、直ぐ下へおりて、體の大きな店員を四人呼んで外套を著せ、

「お前達は一言も云はないで、黙つてあの自動車に乗つて、どこかへ行つて乗り捨てて直ぐに歸つて来い」

と命じたのであつた。

四人の店員は不思議なことと思つたが、命ぜられるが儘に、自動車に乗つて、四谷見附まで行

つて、車をおりて電車で歸つて來たのであつた。——この車の客が、入れかはりになつてゐることは、自動車の運轉手も知らなかつたので、杉山氏の家に歸つて、客はどうしたかねと尋ねられた時、

『新宿のどこかへ寄つて買物をして、それからまた乗つて、四谷見附へ引きかへして、そこで降りてドコかへ行かれました』

と答へたきりであつたのである。

十一、印度人の失踪

頭山翁の屋敷の門は明け放された儘で、玄關にはボースとグブタの靴が二足、行儀よくきちんと並んでゐた。家の中には灯があかるくともされて、人の話し聲が朝まで断えなかつた。

いよいよボース等が逮捕されねばならぬ朝である。門の前にはボースらの乗つて來た自動車と警視廳の尾行自動車とが、あくびをしながら朝まで二人を待つてゐるのである。

牛乳配達や新聞配達が通り出したが、玄關の印度人の靴は行儀よくきちんと、主人を待つてゐ

るのである。今にも出るかと門を出たり入つたりしてゐて待ちあぐんだ尾行は、徹夜の眠い目をこすりながら、恐る恐る玄關へ來て、

『印度人等はまだ出ませんでしやうか』

と尋ねたのである。すると頭山翁は懷手をしたまま、のつそりと玄關へ自ら出て來て、

『印度人は昨晚歸つた筈ぢやが』

『ヒエーツ歸りました？』

頭山翁は黙つてつつ立つてゐる。刑事等はまつ青になつて腰をぬかさんばかりにした。

『でもこの通り靴もありますか、どうぞ隠さずに出して下さい』

『いや居ないよ、昨晚の八時頃に歸つて行つたよ、何なら家を探して下さつても差支がないのぢや』

そう云はれると、お互ひに顔を見あはせて、更に入つて捜す勇氣も出ず、

『いえ先生がそうおつしやれば、御宅には居ませんでせう』

『昨晚來て別れの挨拶をしてそれから歸つたのぢや』

取りつく島がなくて、刑事等は泣きそうな顔をした。

『先生、私等は首になります、どうか助けると思つて出して下さい』

『そりやあ、お前らは良い功德をしたものぢや。お前等が首になつても、印度三億の民を助けることになり、日本と印度の國交を全うすることが出来るのぢや』

この御挨拶に驚いて、まつ青になつた刑事は、警視廳へ電話をかけた。直ぐに高輪署と霞町の刑事が来て、頭山翁の門に網をはつてしまつた。そして周圍をさがして見ると、頭山邸の庭の堀には、大きな泥足の跡が歴然とついでるのみであつて、今更に啞然としてしまつたのである。この時に尾行した刑事は、免職にはならなかつたが、その中の一人だけは、何か感ずる處があつてか、さつぱりと巡査の足を洗つて、今では信州の片倉組の店員となつて、繭の買出し方をやつてゐるといふ。

かくして午前十時の上海行き博愛丸と、正午のポリネシアン號とは、豫定に相違して二人の印度人を乗せないで、出帆してしまつたのであつた。

夕刊——の大事件だ。あの有名な印度人が、自動車の尾行をまいて行衛不明だ。新聞は一せい

に大喝采を以て、頭山翁を讃賞すると共に、面白くこつびどく、警視廳の手抜きぶりを嘲笑したのである。

警視廳も外務省も大狼狽だ。總監も石井外相も草を分けて捜すやうに嚴命するけれども、杳として分らない。

實に警視廳が、立ち始つて以來の大失態である。自動車で尾行をしながら、然も日本人ならいざ知らず、毛色の變つた印度人を取り逃がしては威信に係はるといふので、いこちになつて捜索し出したのである。外國人だから、きつと肉を食ふだらうから、肉屋へ手をまはして、肉を買ふ分量の増した家を見て、片つぱしから家宅捜索をし、パンや米の注文が増へた家と見れば、これも同じく刑事が行つて取り調べたので、この警視廳の印度人捜索のために嫌疑を受けて、家宅捜索を受けた家が七十七軒にのぼつたといふ。

松井高等警視の如きは、まつ赤になつて部下を督勵するけれど、依然として行衛不明の儘である。——かくして大正五年の十二月の一日の晩から、大正六年の五月まで行衛が皆目わからなかつた。齒齧みをするけれども、分らないのであつた。

話は前にもどつて、中村パン屋の主人の相馬氏は、印度人を奥の部屋へ入れると同時に、店員を全部集めて、事情を話し、

「こんな譯で、日本のみならず、印度人のため、アジア人のために、決して人に話してはならぬ。妻君にでも話してはならぬ。これを隠しをへないとあつては、神に對して相すまぬことである。必ず天に誓つて秘密を守つてくれ。それから萬が一、刑事が知つて捕縛にやつて來たら、必ずお前達は三人づつ力を合はせて、刑事を縛つてしまへ。若し正服の巡査が來て、劍をぬいたら、お前達は庖丁で刺しても良い、その間に俺は必ず、二人を逃がしてしまふから」と嚴命を發したのである。この事は實によく守られた。相馬さんは印度人のため、店をつぶしてもかまはぬ、命も棄てても良いと決心したのである。

十二、石井外相の感謝

草を分け、地を掘るやうに搜すけれども、二人の印度人の在家は分らぬ。イギリス大使の抗議は日に嚴重になる。警視廳は板挟みになつて血眼である。

ドイツの警察制度とその組織を争ふ日本の警察が、六ヶ月の日子を費しても尙ほ、二人を發見出來ぬといふことは、イギリスの大使にとつては、確かにベテンとしか思へなかつたであらう。遂にイギリスの大使は石井外相に對して、皮肉な言葉を毒突くに至つたのである。石井外相としては、イギリスの奴隸の如く、また番犬の如く、イギリスの御命令が一大事とばかり、陛下の御言葉の如く恐縮して、岡つ引き根性を發揮してゐるのではあるが、イギリスの大使の身になつてみれば、石井が日本の大臣で、日本の臣民であるに相違なく、都合よくしてやつてゐると見るは當然で、疑ひは當然である。

然し石井外相は何分にも日本人である次第だから、イギリスの大使に平身低頭して、小學生が先生に叱られる時のやうに言ひわけをしても、イギリスの大使の疑ひの晴れぬのは無理もない。イギリス大使の皮肉やイヤミが積つて行く中に、石井外相の胸には、何時しか自然に、コンナにしてまで日本人たることを忘れてイギリスに忠誠を計つてゐるのに、餘り人を馬鹿にするといふ反感が湧いて來、そしてやつと自分は日本人で有つたなと覺り初めたらしい。——その時、外務省の若手が、印度の事情を翻譯して來たのを見ると、みなボースやグプタを日本の政府が保護し

て、かくしてくれたことに對する感謝の文章であつた。

石井外相は印度に於ける反響が、これほど大きからうとは思はなかつたのであつた。實に彼等は石井外相がうまくやつてくれたやうな調子なのである。石井外相は、今更に自ら恥かしくなつたのである。

五月のある日、寺尾亨博士の處へ、石井外相から来てくれといふ手紙が來たので、寺尾博士はまたポースの追求かと、苦い顔をして外務省へ行つた。すると案に相違して石井外相は、

『印度人を追放しやうとした俺が悪かつた。今になつて印度からの感謝に驚いてゐる。早速今日警視廳へ搜索の中止を命じ、暗に保護することを命じて置いたから、安心してくれ、このことについては、君等一同に感謝したい。ついでに頭山君に是非逢つて、御禮を云ひたいから、逢はせてくれ』

と云ふのであつた。それで寺尾博士は、

『分つた。君もやつと目が覺めたかね。然し頭山に逢ふと云つた處で、頭山は君の處へ行くまいし、君も頭山を訪ねることは大臣の手前出來まいから、どこかで逢はせやう』

とそう云つて歸つて、日を期して、四谷の三河屋で、二人を逢はせることにしたのであつた。

その晩になつて、石井外相は頭山翁に對して、いろいろと感謝の意を表したところ、頭山翁は、

『うんそうか、そうか』

とたつた、これだけを語つたのみで、他には何事も責めなかつたとのことだ。それで石井外相は寺尾博士に向つて、

『どんな處に隠したのか』

と尋ねたので、寺尾博士は、新宿の中村屋といふパン屋の奥の二階の、六疊の間に監禁同様に押し込めてあるので、體がぐつと瘦せてしまつた、と云ふことだと云ふ旨を細かに話すと、石井外相はそれを聞いて、

『そりや人道問題だ』

と云ふたとのことだ。——どうも恐ろしい人道問題もあつたもので、イギリス大使の命令で海外へ放逐するのが人道問題でなくて、救助して六疊間に押し込めて置くのが人道問題だそうで、寺尾博士は吹き出したとのことである。石井外相は間接に相馬さんに命を助けられたのだ。

十三、日本へ歸化

かくしてボースは助けられ、グブタは目下メキシコに渡つて、畫策をしてゐる。
 二人が相馬氏の家に保護されてゐる間の日課の一つは、黒光女史が、二人に日本語を教へることであつたが、二人とも驚くべきほどの上達で、ことにボースの進境は早く、半歳の中に、日本語を自由にあやつるのみか、日本の文章を読むことが出来るやうになり、今では日本語の演説は、その雄辯なること、これが印度人かと驚くほどである。

ボースは當時タクルを名乗つてゐたので、相馬氏は之に田口といふ姓を與へ、グブタは久保田と呼んでゐた。犬養翁は更に田口の姓に豊といふ名をつけて、田口豊と最近まで呼んでゐた。ボースの身が自由になると共に、相馬夫妻はボースの人格に惚れてしまつて、その愛嬢の俊子さんを、無理に説いてボースの妻にさせた。今では六つと四つの二人の子があり、昨年遂にボースは日本に歸化してくれた。——僕は敢て歸化してくれたといふのだ。僕はボースが日本に歸化して『くれた』ことを悦しく思ふ。日本を見棄てないで、日本と印度は永く永く、握手をして行



列後 相馬氏息令・ボース夫人・ボース氏
 列前 相馬夫人黒江史・ボース氏息令・ボース夫人・相馬愛藏氏

かねばならぬ。

更に僕はボースさんと俊子さんの混血児の二人に對して、二人が他日大きくなつた時、日本人にも稀なる英雄であるこの父と、祖父母の人格を知つてほしいのだ。そしてボースさんの血と俊子さんの血が合して、一つとなつたやうに、その子供さん等も、必ず印度のために盡してほしいのだ。——印度と日本の結合のために盡してほしいのだ。

ボースさんと俊子さんを結んだ愛は、やがて印度と日本を一體とすることを暗示してゐる。ボースさんの子供等よ、おん身の父なる人の在世中に、おん身の父の祖國が獨立せざる時は、おん身等は父に代つて印度三億の民衆のために立つ義務がありますぞ。

今ボース氏は明治神宮に程近い、青山の穩田に靜かな平和な生活を營んでをり、世田ヶ谷の國士館の先生をしてゐる。願はくば彼等一家の上に光榮と勝利と幸福の輝く日の近からん事を。

(大正十四年一月「東洋」)

追記 ボース夫人はそれから問もない大正十四年三月四日に、過勞が元で亡くなられた。その葬儀は芝の増上寺であ
げられたが、筆者も葬儀の末席に加はる光榮に浴し、斷腸の涙をしばらざるを得なかつた。謹んで俊子夫人の冥
福を祈る。

相馬愛藏氏の本體

— 昭和十二年四月二十二日、中村屋新館落成祝賀會席上祝辭 —

私は漢方醫學をやつてゐる中山忠直といふ者で、私の發明した漢方の中山胃腸薬を、中村屋さんで御取次を願つてゐる者であります。

先き程から、相馬さんを日本一の菓子商だの、日本一の小賣商だのといふ、御讃辭が澤山にありました。私はこの御讃辭に對して、少しく異論があるのであります。なるほど相馬さんは菓子屋としては日本一、小賣商としても日本一かも知れませんが、そんなことは相馬御夫妻の誇りでないと思ひます。また私としても、相馬さんが日本一の菓子屋であるからとて、御交際を願つてゐるではありません。

商人としての日本一なら、三井があり、三菱があり、鴻池があり、安田があり、相馬さん以上の金持は、數千人も有らうといふもので、菓子商としての日本一は、云はゞ井戸の中の蛙みたいなものです。

だが中村さん——イヤ相馬さんの御偉いのは、日本一の菓子屋が内職であらせられるからであります。相馬さんは日本一の菓子屋でなくても、日本で百番目の菓子屋でも良いのであります。相馬さんは日本の小賣商王だから偉いのでなく、その商賣が内職であるから偉いのであります。

では相馬さんの本業は何かと申しますと、私は相馬さんの本職は斷じて『國士』であると申したいのであります。皆様は此處に御臨席のボース様を御存じであります。ボース様は印度獨立運動の大黒柱であります。そのボース様の一命を御助けし、天晴れ、大正の天野屋利兵衛となられたことを御存じかと思ひます。ボース様の事件は、相馬さんの御生涯を飾る、最も劇的な一面であります。相馬様御夫妻の國士としての隠れた御功績は、この外に實に限りなく澤山にあるのであります。世には富豪で、生きてゐる時に澤山の金を寄せ集めて、所有慾を満足させ、死ぬ時に當つて、それを冥度へ持つて行けぬ所から、遺言をして、何かの事業を贈る人が澤山にあります。これらは徹頭徹尾、慾と賣名であります。

ところが、相馬さん御夫妻は、全くそれとちがひ、御自分の目になつた人間に對して、生きた援助をされるので、そのために世に出た人が、ドノくらゐ澤山にあるか知れませんが、相馬さん

の御生命は隠れて人生に盡されることで、つまり國士であります。人間は何等かの方法で衣食の費を得ねばなりません。相馬さんは國士としての生活の資用を、たまたま菓子屋に見出されたので、菓子屋は内職であります。私は相馬さんが日本一の菓子屋から、東京で百番目の菓子屋に没落されても、決して輕蔑しないのであります。何となれば、菓子屋は相馬さんの餘技であるからであります。だが勿論この様な心配は無用であります。

先刻、發起人の方から、相馬さんに銅像を贈らうかと思つたが、御辭退になつたから中止したと云ふお話がありました。これを聞いて、私は良い事だと思ひました。何となれば相馬さんの銅像は、私達のやうな、商賣上の縁故でつながつてゐる者が作らなくても、相馬さんが御亡りになつた後で、相馬さんに直接關係のない國民が建てたり、或は國家が建てたりするからであります。銅像といふものはかくの如き性質の物であります。日本政府が建てなくても、印度が獨立した時には、印度の政府が建てるに相違ないのであります。

先刻、貞山の講談を聞き乍ら、私は思ひました。相馬さんがポース様を御助けになつた話は、後世になつて天野屋利兵衛、乃木大將などと共に、永く日本の歴史のある限り、講釋師に傳へら

れるのだと思ひます。相馬さんの御仕事は、當然に大臣以上であります。私にも大臣大將の友人がありますが、相馬さんくらゐの人物は實に稀れであります。

今やアジヤは獨立に向つて正確な歩みをつゞけてゐます。近い將來に、印度は立派にイギリスの規範から脱することと思ひます。そうするとポース様は、孫逸仙が支那へ歸つたやうに、凱旋將軍として印度へ歸られませう。先年ポース様は、印度から日本へ歸化されましたが、今度は逆に、日本人ポース様が印度へ歸化される日の、一日も早からんことを祈るものであります。

ポース様が印度へ歸化される日は、相馬さん御夫妻が、國賓として印度へ迎へられる日であります。その光景を想像して見ただけでも、私の胸は躍るのであります。

どうか、その日が來た時には、本夜ここに御列席の人達をみな、一つ印度見物に御招待下さいませんか。私は今から相馬さんに御願ひして置くのですが、どうです皆様、これを堅く相馬様と御約束したいと思ひますが、如何でありませうか。(拍手)——『中村屋』第五號所載——

送 別 (假託)

あゝこの樓うちのこの二階は
いつ來ても良い潮風だな
それにあの爽やかな波の音よ
晝間の疲れがすつきり洗はれて
頭がせいせいするではないか
それにこの新しい魚の味よ
たまらないではないか
——どれ酒をつがう

だがタラクナート・ダスよ

今宵は何時もとは違つた味で
この刺身を食ひ
酒を飲まねばならぬな
さう思ふと さすがにこの酒もにがい
明日はいよいよお別れだ
無事に暮してくれたまへよ

おゝタラクナート・ダスよ
君は印度獨立運動の一柱石
幾度か死地いくぢをくゞつて働き
厳しいイギリス官憲の追捕から
やつと日本へ逃げて來たが
堪忍してくれよ日本もまた

君の住めない場所なのだ

イギリスの御機嫌を伺つて

腰ぬけの我が外務省の役人は

まるでイギリスの憲兵のやうに

君を捕へて渡さうとするのだ

それで君はまた明日こつそりと

横濱の棧橋からアメリカへ

亡命して行かねばならぬのだ

ダスよ　ダスよ　堪忍してくれ

俺は日本人として冷汗が流れるのだ

何といふ腑甲斐のない日本だ

日本はアジアの盟主になつて

アジアを白色人種の手から

解放せねばならぬ使命があるのに

このざまだ！

君よ　黙つて許してくれたまへ

近い中には俺達青年の手で

日本を理想的な國に改革して

君のやうな志士の亡命國にするから

ダスよ　君はアメリカに行く

しかしアメリカもまた

君の安住できぬ處かも知れぬのだ

さう思ふと涙がこぼれる

鳥には巢 狐には穴

志士たるが故に君には家もない

しかし今日の君の身の上がまた

明日の俺の身の上でないといへようか

——さあ 酒を一杯

君に始めて逢つたのもこの部屋

そして今宵君を送るのも同じ部屋

何といふ因縁の浅からぬことだ

萬感がこもごもに起るではないか

健かに暮してくれよ

タラクナート・ダスよ

君と飲むのもこれが最後

しかし命があつたらまた會はう

——さあ もう一杯

——大正十二年作——

此詩はタラクナート・ダスの名を借りて、ボース氏が退去命令を受けた時の日本人の氣持を歌つたのだ。この詩にダス氏の名を用ひたのは、氏の名をも文學に止めたかつたからだ。ダス氏は今アメリカにゐて、印度獨立運動會長をしてゐる。

フイリツピン 獨立の志士
アルテミオ・リカルテ將軍



嬢令・人夫タゲア・軍將テルカリ・嬢令
(てに前一エフカンハリハ)

一、淋しいカフェー

横濱の山下町一四九といへば、ちようどインターナショナル銀行の方から、支那街へ出やうとするところだが、そこにハリハン・カフェーと呼ぶ、さゝやかな喫茶店がある。地震ですきんだバラツクの町にも、とりわけて貧弱な店で、蒸し暑いトタン屋根の下に、いつも空の椅子が五六脚、たいくつきに欠伸でもしさうに並んでゐる。見かけるときは、いつも客のゐたためしが無いやうな、客の稀な淋しい店だ。

入口の標札には、南彦助と出てゐるが、「いらつしやいませ」と挨拶するのを見ると、南洋の血がながれてゐるが、それでも晴々した瞳の快活な娘で、その奥にはまた母かに見える瘦柄な、かなりの年輩の女がすはつてゐる。二人ともニコ／＼と、いつも愛嬌がよいが、まだ日本には慣れないと見えて、言葉がもどかしそうである。時たま立ちよるカフェー廻りらしいのから、冗談を云はれても、悪い顔ひとつせず、南洋人にめづらしい氣高きがある。

夕方から夜へかけて、主人らしい色の黒い頑丈な體の持主が、マドロス・パイプをくはへなが

ら、白いコック服を着て、客へコーヒーなど運んだりしてゐるが、これまた明らかに日本人ではない。暇さへあれば、いつも黙つて電燈の下で、外國の本や雑誌に読みふけてゐる。英語などで話しかければ、至つて物柔かで腰もひくい、その眼にはどことなく、云ひやうのない犯しがたい光がある。和らかさと鋭さと威厳がある。

この淋しいカフェーにも、月に一二度は非常に賑かな時がある。それはフィリップンから船がついた時で、その時だけは流石にいつも淋しい店も、ぎつしりと一ぱいの人になり、香りの高いマニラ煙草をふかしながら、人々は大聲に話したり、机をたたいて論じたり、娘さん達と笑ひ合つたりしてゐる。

この日のカフェーは忽ち飯屋に變ずるので、いつもはコーヒーしか賣らない店が、どの客へも飯を出してをり、椅子がないので立ちながら食つてゐる人達さへある。おかみさんと娘さんは、食物を出すのに天手古舞をしてをり、客のなかからも手傳つてゐる者がある。

こゝはカフェーであり、飯屋でもあるやうだが、その賑ひのなかに立つてゐると、人々の中に漂つてゐる空氣が、普通のカフェーと異つてゐるのを感じない譯にゆかぬ。

即ちそこではカフェーの主人や娘に對する客といった風でなしに、むしろ客が主人や娘に非常に敬意を拂つてゐるのが見受けられる。——かうした賑かさは船が出ると共に去つてしまつて、あとの店はまた、がらんとした空椅子の淋しさに歸り、羽蟲が電燈に集つてゐるだけになるのだ。

フィリップンから船が着いた時だけ賑つた食堂になる店、そして平生は淋しい喫茶店。それは主人がフィリップン人であるせいだらうか。それとも何か別なわけがあるのだらうか。とにかく不思議なカフェーであるに相違ない。

たまさかな日本人の客は、通りすがりに何心なく立ち寄つて、淋しい店だと思つたきりで、無心に去つて行くのであるが、我々のやうな、この人達の素情を知つてゐるものは、この淋しいカフェーの椅子に腰かけて、主人や主婦や娘と話をとり交はしてゐると、世が世であればなあと、思はずほろりとさせられるのだ。つましい貧しい生活でありながら、貧しさに比例して、この一家の人達が神々しく見えるのだ。

然らばこの主人はそもそも何物であらうか。これこそ南彦助と變名してゐる、フィリップン獨

立運動の首領、アルテミオ・リカルテ將軍で、カフエーはその假り寢の佗び住居である。

それでフィリッピンから船の來るたびに、かくはこの店の賑はう次第なのだ。人々は争つて將軍の亡命の心をなぐさめるためにやつて來て、將軍の健かな顔をとりまひて、過去の追憶や、現在の祖國の悲運や、悲觀すべき未來のことなどを語りあふのだ。涙多き青年は、そこでフィリッピンの獨立の歌を唄ひ、慷慨悲憤の士は、拳で机を叩きながら叫ぶのだ。

フィリッピンの獨立と云へば、すぐに人々はアギナルド將軍のことを思ひ出すであらう。彼はあたかもフィリッピンの運命を、一人で荷なつて立つてゐる偉丈夫のやうに傳へられ、押川春浪などの小説にまで、天晴れの英雄ぶりを歌はれてゐるが、事實は日本へ傳へられてゐるのは正反對だ。なるほど彼は詩人にふさはしい容貌をしてゐる、若きアギナルドは、その美しい姿と魅力と智慧と火のやうな熱辯によつて、フィリッピンの獨立軍のリーダーとなり、スペイン軍を打ち破つて獨立を宣言するや、先は衆望を負ふて大統領に押されたのであつた。しかし再びアメリカとの戦端が開かれた時の、彼の態度はどうであつたか。

潮のやうなアメリカ軍に對して、茫然自失したのは彼でなかつたか。第一にアメリカの陣門に

降つたのは彼でなかつたか。要するに彼は一個の口舌の雄に過ぎなかつたのだ。彼は形容詞と芝居の英雄に外ならなかつたのだ。眞個の獨立家としての、忍耐力と大艱難に處して敢然たる勇氣を缺いてゐた。花の如く華かで、花のやうに萎れるのも早かつた。順風に乗じて天馬の空を行くが如く、逆遇になれば、直ぐに腰の折れてしまふ怯懦漢に外ならなかつたのだ。

大統領であり總司令官であつたアギナルドが、降を請うたにも係らず、獨り殘兵を率ひて死守轉戦して終りまで降らなかつたのは、實にわがリカルテ將軍である。孤壘日に危きを護りつつ、祖國の難に殉ぜんとしたのであつた、獨立軍の勇氣と忍耐と光榮とは、實にリカルテ猛將軍あつたればこそである。

フィリッピン獨立の烽火

フィリッピンは始め、スペインに占領されてゐたのであるが、このスペインの殖民政策なるものは、その土地に強大なる兵制を敷いて民衆を威壓すると共に、宗教政策を併用し、殖民地を涸渴せしめると云ふ様な亂暴なものであつたために、無用な大伽藍は所々に建設され、僧侶は貴族

のやうな豪奢に耽つてゐた。そしてその僧侶の数は、軍隊と略々同數に達する有様で、これ等の者が豪奢な生活をするために、フィリッピンは戒嚴的な酷令と、不斷の苛斂誅求の下に置かれたのであつた。奪へるだけ奪へ、吸ひ取れるだけ吸ひ取れ、と云ふ悪魔か強盜に等しい者共に寄生されてゐた譯である。民衆は働いても働いても、重税からまぬかれることが出來ず、働けば働くほど、よけいに奪はれるといふ有様で、貧苦は全土を支配し、怨みは全島に滿ち渡つた。幸福は奪はれ、愛は奪はれ、光明も希望も消え果て、たゞ前途には絶望と暗黒があるばかり、僅かに悲しみを一杯の椰子酒に心やる外はなかつた。

この時突然、スペイン首府マドリッドに留學してゐたホーサー・リザール博士が、獨立運動のために捕へられんとして、秘かに國へ歸つて來た。

彼はスペインの都の繁榮と淫蕩を見、彼等の豪奢に驚いた目で、祖國の人々の生活を見たのであつた。同胞はなんと云ふ憐れな生活をしてゐることか、自由もなく、平和もなく、たゞ呻吟だけを持つてゐる。ああスペインの淫蕩よ繁榮よ豪奢よ、そはわが同胞の人身御供から得たものであつたかと、彼の血潮は燃えた。

リザールは辯護士を開業してバンを得る傍ら、暇さへあれば同胞の間を駆けまはつて、獨立心を鼓吹したのであつた。彼は非常な雄辯家であると共に、フィリッピンが今なほ誇つてゐる、偉大な國民詩人であつた。雷のやうな雄辯に、焰のやうな詩と文章とで、彼は眠れる同胞の魂を呼びさますために働いたのであつた。——かくして間もなく、この熱烈な新歸朝者を中心に、愛國の血に燃ゆる青年の秘密結社が出來、ここを中心として全フィリッピン獨立熱は燎原の火のやうに燃えひろまつたのである。

Independensia なる秘密新聞は發行され、人々は來るべき日のために、獨立の旗、三星旗さへも作つた。——彼等は、やがて曉の潮風にこの旗の翻るのを待ちに待つたのである。

しかしかくの如き獨立準備が、どうして顯はれずに居らう。政府は遂に之を探知し、リザール博士は捕へられ、重立つた同志五名と共に、絞首臺上の露と消へたのである。死刑の前夜、彼は死を豫感して、盡きぬ愛國の情を一篇の詩に託したのである。句と句の間に愛國の火は燃え、言葉と言葉の間に血が滲んでゐる。この詩は彼の死刑後に公にせられ、いまでも獨立の歌と共に、あまねく人々に唄はれてゐる。いま拙いその散文譯を左に掲げてみやう。

1

さらば陽に輝きし祖國よ、

東海の眞珠の國よ、エデンよ

我れ汝が爲めに悦びて黄泉へ行くべし

たとへ生命は若く希望に燃ゆればとて

汝が爲めには などが命の惜しからむ！

2

戦の庭の、闘ひ酣はなる時

人は命を捨てて疑ふことなし

柳も百合も、月柱樹も絞首臺も

戦場も格闘も悲愴なる殉教も

祖國のためには選ぶことなし

3

我れ この世を去り行く時

しのゝめは赤く空を染め、夜は明けんとす

この紅は我が血なり

祖國よ、この血を用ひよ

赤き一筋の夜明けの光を

4

我が幼かりし日の数々の夢も

潑刺たりし青年の日の夢も

たゞ汝、東海の眞珠の國フィリッピンが

涙に暗き眼を拭ひ、うなだれし額を上げ

悲哀と屈辱を打ち拂ふことのみなりき

5

我が生涯の夢！ 燃ゆる熱情！

萬歳！ と死に行く魂は叫ぶ
太陽にめぐまれし火の國のため
我が生命を捧ぐるは光榮なり
永遠の夜を通し、我は汝の胸に宿らん

6

時を経て 草茂き我が墓場に

一輪の小さき花の開かば

願くば手折りて汝の唇に口づけよ

さすれば地下に眠る我が額は

汝の温かき心と強き意志を感じん

7

やがて寂しき月、我が墓地を照らし

また暁の榎めやすき光が墓標を染めん

或はまた悲しき風 物騒がしく吹くこともあらん
その時若し一羽の小鳥 我が近くに來らば
思ひのまゝにその清らかなる調べを唄はせよ

8

嗚呼、輝ける太陽よ現はれて雲霧を一掃し

我が臨終の繰言を天の彼方に吹き散らせ

黄昏の空、澄み渡りて静かなる時

若し同胞が我が早き死を悼まば

願くば我が魂の天に昇らんことを祈れ

9

また若くして逝きし人々のため
不正なる壓制に泣く人々のため
愛兒を失ひて悲しむ母親のため

孤兒、寡婦、鐵窓裡に呻吟する志士のため
その贖罪を祈られよ

10

眞黒き夜の襲ひ來り
墓所にはたゞ聖靈のさまよふ時
死の神秘と靜寂の中に
かそかなる琴の音響き來らん
そは我なり、そは祖國を想ふ我が聲なり

11

かくて年を経、我が墓を訪ふ人も絶え
墓石もくちて跡なき時
鋤よ 我が柩の箱を破り
我が死灰を國土に撒け

死灰が空しく埋沒せむうちに

12

我が死灰、深き谷間に陥らば
願くば我が國土の谷間を飾らん
清き調べ、妙なる樂
香と光と彩と歌と
凡ては我が信仰の聲とならむ

13

おゝ尊き祖國、神々しき悲哀
愛するフィリッピンよ、我が別れの言葉を聽け
我れ今兩親、家族を捨て
壓制の惡政の羈絆を脱し
自由なる神の國へ行かんとす

さらば我が有縁の父母よ

最も愛せし竹馬の友よ

我は今、此世を去りて神の許に行かんとす

さらば遠きにある友よ、愛する人々よ、さらば

死は休憩なり。

リザールの死刑！ 飛報は晴天の霹靂のやうにフィリッピンの津々浦々に傳つた。この一刹那、今まで押へに押へつけられてゐた島民の鬱勃の氣は一時に爆發した。

一八九六年八月二十六日、先づその時の新人アギナルドは同志を集めて、カヴァイテ州に兵をあげるや、全國はたちまち響に應じて一齊に立ち上つた。銃あるものは銃をとり、劍あるものは劍をとり、斧や棍棒や鋤や鎌をもつて、女も子供も一齊に憤起した。一揆はひろまり組織化され、各々民族の英雄をその中心人物に選んだ。そもそもフィリッピンは三つの主な種族からなつてゐ

るのであつて、ダゴロ族からはアギナルドが選ばれ、イロゴット族からはアントニオ・ルーナーが推され、ミンドロ族からはリカルテが選ばれた。そしてこの三種族の聯合軍は、總首領にはアギナルドを選び、後これを大統領にしたのである。

當時の總督はドン・ローマンブランコ・エレナスであつたが、非常な腰ぬけで暴徒を如何ともする事が出来ず、懐柔策をとるだけであつたので免職となり、ドン・カミーロ・バラヴェイエハ將軍が代つて總督についたが、多病で職を全うすることが出来ず、リヴェラ將軍が之に代つてビクタ・ナ・バートの要塞に立てこもり、一揆の鎮壓にかかつた。

然し獨立軍の勢は日に盛んで、とても鎮壓の見込がないので、スペイン軍は使をアギナルドに遣はし、年月をきつて獨立を許すといふ約束の下に、徐々に不平分子を除く目的で媾和を提議した。かくて一八九七年、即ち明治三十年の十二月にビクタ・ナ・バート媾和條約が締結された。

その條約によれば、アギナルドが與黨と共にフィリッピンより香港に行く時、四百萬弗の償金を與へ、若しフィリッピン軍が銃八百個をスペインに渡す時、更に二百萬弗を與へ、銃が一千個以上にのぼる時は更に二百萬弗を與ふること、都合一千萬弗の償金を與ふるといふのである。

アギナルドも不完全な武器をもつて約一ヶ年半も戦つて獨立が出来ず、果して獨立が成功するやら、せぬのやら分らぬので、それでは償金を取つて一時フィリッピンを退き、その金で武器を買ひ收めるが得策だといふのでこの和議に應じた譯である。

かくしてアギナルドは、部下の將校四十名と共に香港へ移り、香港在住の志士と相謀つて、フィリッピン委員會を開き、アギナルドが會長になり、ルーナーとリカルテが軍務を司り、ボンセが書記官長といふ格になつたのである。アギナルドが香港に移ると間もなく、スペイン本國からはオーガスチン總督が赴任して來て、著々として軍備をととのへ、再び獨立軍の乗することが出来ないやうにしてしまつた。このやうにして香港の假政府と、オーガスチンが睨みあひの姿となつたが、間もなくスペインはキューバ島の問題で、アメリカと戦端を開くことになつたので、その機に乗じて獨立軍は再びフィリッピンの土を踏むことが出来た次第である。

三、香港の假政府

香港の假政府は、島の東部の山下にある三層樓であつて、後には榕樹がこんもりと繁つて涼し

い木蔭を作つてゐた。

この榕樹の三層樓に志士達は會して、大事を議したのであるが、總務はアギナルドが執り、事務は先に述べたやうにルーナーとリカルテが當り、香港のマリアテレス街に、貿易商を開いてゐたバサといふ富豪が大藏大臣にあげられ、サンチゴといふ男が外務大臣に擬せられてゐた。このサンチゴといふ男は、香港の軍器街の角の家で、自轉車屋をやつてゐた快男子で、派手な競争服を着て、大聲に人を押しつける向つ張りの強い男であつた。革命時代には、いろんな妙なところから人材が飛び出すものであるが、自轉車屋の外務大臣などは、たしかに異例的興味をそゝるものである。彼は今では現に、ブラカン州の州知事をして、靜かに時の至るを待つてゐる。

香港に獨立假政府が出来たと云ふ報が、一度本國に達すると、義捐金はたちまち集り、男は道具を賣り、時計を賣り、女は筭や指輪を賣つて送金して來た。その額か百萬兩の巨額にのほり、それで先づ船を買ひ込んだのであつた。

獨立運動家のうちには、アメリカの助けを借つて獨立を計らうとするアギナルドの一派と、日本の助けによらうとするラモスやリカルテ等の一派があつたが、愈々香港に假政府が出来ると、

支那を破つた日本の援助を請はうといふ説が有力になつて、日本公使といふ格で、法學博士のホーセ・ラモス氏がやつて來たのであるが、當時の外務省は、今と同じく腰ぬけで、ラモス一行に非常な冷遇を與へるばかりか、當時の外相であつた陸奥宗光の如きは、彼等に向つて『君等は日本のやうな貧乏國に従ふよりも、日本よりも金があつて、もつと文明なアメリカの屬國になる方が、フィリッピンとして、どれほど幸福か分らないぢやないか。』といふことを、臆面もなく云ひ切つたとのことである。何といふ恥かしいことか。この當時のことを僕たちは考へただけで、ぞつと冷汗が背中になされるのを感じる。

それでラモスは更にフィリッピンの州知事の連判狀を以つて來て、若し日本の援助の下に獨立することができれば、日本の保護國になるといふことを誓約したのであつたが、陸奥はアメリカを恐れ、そのまゝ握りつぶしてしまつた。實に腑甲斐ない次第であつて、東洋の同胞民族に對して恥かしい限りである。

ラモスが日本へ渡るとき、フィリッピン第一の彫刻家といはれてゐたアバジブルの作つた、明治天皇と皇后との大理石の肖像を献上のために携へて來たのであつたが、右に云つたやうな外

務省の冷淡な煮えきらぬ態度に、すつかり使節達は落膽して、そのまゝ献上せずを持ち歸つてしまつた。

いまでもこの肖像は、香港の大藏大臣のバザ氏の邸内に建てられてゐるところの、ホーセ・リザール博士の記念圖書館の中に飾つてある。當時の事情を知る人たちは、これを見る度に顔を赤らめるのである。

日本政府との交渉がこんな有様で、使節の一行はラモスを後に残して、香港に引きあげたが、ラモスは獨り踏み止つて外務省や有志の間を説いてまはつてゐた。そのうちに香港では親米派がいよいよ勢力を得て、遂にアギナルドの説が通つて、日本の助けを借らずに、アメリカ一個の力を借つて事を達しようといふことになり、それやこれやでラモスの處へは假政府からの送金が全く絶えてしまひ、彼は非常な困苦に墜ちたのである。

然るに彼が日本へ來ると早々にも、フィリッピンの獨立に火のやうな同情をもつてゐた石川やす子といふ婦人と相識るやうになり、二人は繁々と交つてゐたが、二人の間は同情から戀愛へと變つてゆき、横濱の山の手に家を持つことになつたが、假政府からの送金が絶えると共に、やす

子は晝は魚を賣つて歩き、夜は按摩をしてその情人を食はせたのであつた。その時分の貧しいラモスの様子と、けなげな、やす子の働きは、フィリッピン獨立運動史の中に永遠に傳へたい美しいローマンスである。

その後、妻の儲けた金でラモスは、いろいろ工面をして、七面鳥を飼つたりし、またスペイン語の教授をしたりして、夫婦共稼ぎで一年ばかり貧困と戦つてゐたが、スペインとアメリカとの戦端が開かれて、祖國が急を告げるや、彼は、俄かに愛妻を残して歸つてしまつた。フィリッピン獨立の時、海軍省が軍隊を派遣したのは、實にこのホーサー・ラモスの運動の結果に外ならなかつたのである。

彼が歸國してみると、悲しいことには祖國はみな親米主義に傾いてゐて、彼はむしろ大勢に反くものとして、ここにも冷遇の悲運にあひ、脾肉の歎にたへかねてゐたが、アメリカが愈々その野心を明にして、フィリッピンの占領を實行せんとしたので、彼は再び日本への使者として、横濱の埠頭に立つたのであつた。

愛する妻はいづこぞと、埠頭の人波を分けて見たけれども、その優しい妻が見出されない。彼

の胸はかきむしられる思ひがして、家へかけつけて見ると、ああ何といふ呪はしいことであらう、愛妻は、か弱い體でラモスを養ふために、あまり過勞したために、遂に重い病を得てラモスの名を呼びながら数日前に、死んでしまつた後であつたのだ。——ああラモスの心情はどんなであらうか。彼は祖國の滅亡に血を吐く思ひで、破れた胸を抱いて異國の情人の許に歸れば、彼をかき抱いてくれると思つた情人、かつて苦しい境遇に身を粉にして盡してくれた愛人は、もうこの世にはゐないのだ。彼の前に置かれたのは新しい骨壺。彼は運命のみぢめさに、その冷たい冷たい骨壺をしかと抱きしめて、情人に接吻することく、その骨壺に接吻しつつ、男泣きに泣いたのであつた。——ああ温かき腕に抱かうとした情人は、一壺の骨になつてしまつてゐたのだ。どんなにかラモスの心は亂れたことであらうか。之はあまりにも小説的な悲劇である。誰かラモスの心情を思つては一掬の涙をこぼさぬ者ぞ。

彼は破れた胸に骨壺を抱いて、もう再びフィリッピンへ歸らず、またどうしてもアメリカの國籍に入るのは嫌だと、しばらく國籍のない人間になつてゐたが、參謀本部の福島將軍の世話で、日本に歸化し、死んだ情人の家へ改めて入婿となり、ホーサーの名を保政と書いて、石川保政を

名乗り、今では日本人として再びフィリピンに渡り、祖國のために働らいてゐる。マニラの郊外に大きな花園を作つて生活をしてゐるが、後妻もやはり日本人で、良い家庭を作つてゐる。今でもアメリカから注意人物として、非常に嚴重に看視されてゐるが、フィリピンへ上陸した人は、是非とも一度あつてほしいものだ。日本語も十分に出來、アギナルドなどと異つて人物もしつかりしてゐる。

四、祖國はアメリカに併呑

香港に假政府を作つて、獨立の機を待つてゐると、かねてから東洋に足だまりを得ようといふ野心をもつてゐたアメリカが、キューバ島の問題で戦端を開いたので、香港政府はアギナルド將軍の提議に基いて、シンガポールのアメリカ總領事イー・スベンサー・ブラットーに計つて、アメリカとフィリピンは攻守同盟を結ぶことになり、アメリカはフィリピンのスペイン艦隊を破り、獨立軍は陸軍としてオーガスチンを破らうといふことに決し、アメリカは「フィリピンのどの黨派に對しても交戦せんとするものではない。島民をスペインの壓政より救ひ、之に自由を

與へんがためのみ」と云ふ宣言を發し、戦に勝つた後は、必ず完全なる獨立を與へようといつて、巧みにこれを欺いたのである。フィリピンはアメリカを救世主の如く思つたのも無理はない。

獨立軍の首領達がフィリピンに上陸した後、即ち同年の六月になつて、香港の假政府から武器を満載した汽船が二隻、フィリピンに向つたのであつたが、どうしたことか此船は二隻とも途中で行衛不明になつてしまつた。別に大嵐に出逢つた譯でもなく、暗礁に乗上げた形跡もなくまたスペインの軍艦に打ち沈められた模様もなく、獨立軍は不安な絶望の中に突き落されたのであつたが、後になつてアメリカの軍艦が途中で、この二隻を打ち沈めたのであると云ふ、信すべき噂が起つた。この一艘は布引丸で、布引丸は世間に云はれてゐるのは違ひ、全くアメリカの陰謀に外ならなかつた。濡衣をさせられた人達は氣毒だつた。

フィリピンの獨立をアメリカが助けるといふ情報が來ると同時に、ホーサー・ラモスなどの意見を重んじ、外務省と意見を異にしてゐた參謀本部は、俄かに陸軍からは明石元次郎少佐と、時澤右一大尉を送り、海軍は川原要一少將を司令官として、軍令部からは莊司義基大尉、吉田少佐等が搭乗し、松島、秋津洲、明石の三艦を送つた。當時の秋津洲の艦長をしてゐたのは齋藤實

で、東伏見宮殿下も御搭乗になつてゐた。

獨立の戦の幕は、先づ海戦によつて切つて落され、アメリカの軍艦は、キャピタ灣に於てスペインの砲艦七隻を見事に打ち沈めてしまつた。

海軍は全滅したにも係らず、流石に本國から選ばれて來たオーガスチンだけあつて、彼は頑強に抵抗して、どうしても降ることをしない。獨立軍はマニラから五哩の地點のマラテまで押し寄せたが、要塞が堅固で、どうしても落ちない。これさへ落ちれば、サンタ・アーナ、バンダカーンなどの小都市を経て、直ちにマニラ城に攻め入ることが出来るのであるが、既に二ヶ月もこれを包圍して陥入れることが出来ず、この陣中でルーナー將軍は不明な原因で急死してしまつた。ルーナーは醫者であつて、特に細菌學に於て世界的發見があり、ボンセの如きは、わが北里博士に比して誇つてゐたものである。ルーナーの死因は不明であるが、アメリカ人のために毒殺されたと云ふ事に説は一致してゐる。

ルーナーの死後、リカルテが司令長官になり、マラテの要塞を攻めたけれども、頼みにしてゐた香港からの武器は來ず、やはり抜くことが出来ない。そこで親日派のリカルテ將軍は、明石少

佐に相談すると、後日、日露戦争にロシアのガボンを煽動して、ロシア革命を起さしたところのこの奇才は、早速ある奇策をリカルテに授けて、オーガスチンを降らしたのである。

この策略とはマニラの外交團の利用であつた。元來マニラは水の乏しい處で、二十哩彼方のラグナ湖から水道を引いてゐたのであるが、この水道を遮断すれば、マニラは旬日ならずして陥落するに至るべきは、掌を指すより明かである。そこで明石少佐は、獨立軍をしてマニラの外交團に向つて、次のやうな宣告を發せしめたのである。それは戦争の決勝を早めるために、マニラ水道を破壊する。これは人道上に於て悪いかも知れないが、目下の場合では止むを得ぬ處だ。それで若しこのことに都合が悪いならば、外交團からオーガスチンに降伏をすすめてほしい。若し一週間以内にオーガスチンが降伏せぬ時は萬事休す、と云ふ意味であつた。

この二通知を得た列國の外交團は、緊急會議を開いて、オーガスチンを壓迫して降伏をすすめたので、彼は涙をのんで城を開け渡すことに決し、ドイツの軍艦イレネー號に保護されてスペインに去つたのである。蓋し彼をドイツ艦が保護したのは、始めフィリッピンの獨立軍にはドイツが加擔したかつたのであるが、フィリッピン側でドイツの野心を疑つて、彼を問題にしなかつた

からである。

これより先、もはや獨立の成功も近いといふので、キャビテを占領するや、此處に於て獨立の宣言をなし、アギナルドを大統領に推戴することにした。すると間もなく同月の十二日には、オーガスチンとの休戦條約が成立し、オーガスチンの退去は間近かであらうと思はれたにも係らず同日の夕方に至つて、アメリカの陸戦隊の司令官が、單獨にマニラを占領するといふ電報をリカルテに送つたので、リカルテは火のやうに怒り、直ちに全軍に命令して、アメリカ軍の入城に先じて、突貫を以つてマニラに入城してしまつたのである。

その時の市民の歡乎の光景は實に鼎の沸くやうで、總督府廳には、新しい獨立軍の旗は翻り、全市は爆竹と旗と提灯で、男も女も若い者も老人も、夜を徹して花をかざし、旗をふり、酒の満は引かれ、逢ふ人々は「萬歳、おめでたう」と呼び交したものであつた。悪魔は去り、妖雲は拂はれた。人々は美服と美酒と歡喜に酔ふて、街から街へ、家から家へ踊り歩いたのであつた。

しかし悦びは東の間であつた。アメリカの態度は、既に野心に満ちてゐることが明かに認められた。キャビテからは陸戦隊がどしどしと上陸し、總督府廳の國旗をアメリカ國旗に代へんとし

あはや血の雨を降らさうとしたが、アメリカ側の讓歩で一先づおさまつた。だが反目はこれで終つたのではなかつた。十日間ばかりたつと、アメリカからは新しい大陸軍が上陸して、直ちにマニラに戒嚴令を布き、イロイロ港には巨大な貯炭場を設け、香港假政府との前契約を無視して、着々として永久占領の準備を整へ、遂には武力をもつて總督府廳から獨立軍の旗をおろさせ、その代りにアメリカの星條旗をこれ見よとばかり誇らしげに掲げたのであつた。

まふとフィリッピンはアメリカの、ベテンに掛つてしまつたのだ。前門に虎を追うて、後門に狼を迎へたのであつた。フィリッピンは全く、正義人道の假面にだまされてしまつた。かくてフィリッピン人の自由の血は、再び燃え立ち、スペイン人に對して執つた劍を、こんどはアメリカに向けることになつた。

しかし形勢は日に悪くなつた。アメリカは益々軍隊を増加し、新銳の武器を持ち込み、更に支那の義和團事件に参加したウヅ少將を派遣して總司令官とし、獨立軍の鎮定をせしめた。この時の功によつて、ウヅは後にフィリッピン總督になつたのである。

既にして戦ひは、フィリッピンとアメリカとのものになつたので、日清戦役の創痍のいまだ癒

えない我が艦隊は、深い同情をフィリッピンに残して引上げねばならず、参戦の志士また、みな内地へ引きかへした。

初めから親米派であつたアギナルドは、アメリカのこの態度に憤慨したが、この文化的新人はあまりに勝負の数に明るく、始め運命の神に身をゆだねんとしたものの、同志に強要せられて、しばらくは戦つたが、確かな戦意はなく、間もなくアメリカの買収の手につて、年金五萬弗の約束で、遂に降伏してしまつた。昔の虎は今日の猫になつたのである。

アギナルドが降つてしまつたが、わがリカルテ將軍のみは断じて降伏せず、千萬人と雖も我れ往かんといふ大勇猛心をもつて、敢然として勝算のない戦を、武門の意氣地として進めたのである。彼の血管にはフィリッピンの諸民族中、最も慍悍だと云はれてゐるミンドロ族の血が渦巻いて流れてゐるのだ。孤城落日、刻々に運命は定つて行くが、彼はなほ運命の神をすら敵としようとした。

貧弱な武器を以つて、彼はよく潮のやうなアメリカの軍勢に對して戦つた。益々減じて行く兵をもつて、益々勢を得て来る敵に向つた。彼は日に日に南へ南へと追はれて行く。遂に彼はルソ

ン島の南端を追はれて、海を越へて南のミンダナオ島に渡り、同志は日に日に倒れて行き、遂に銃丸が盡きて、少數の同志と共に、捕縛せられることとなつた。

この戦の中に、一人の勇敢なる若い女がまぢつてゐた。その夫なる人と共に、二人の子供を背に負つて軍に加はり、彈丸や食糧を運んで行つたが、遂にその婦人の夫は敵彈にあたつて倒れ、主將リカルテにその妻子を託したのであつた。その勇婦は更らにミンダナオへ軍に従つて行つたが、ミンダナオに渡らうとした時、その一子も亦、敵彈にあたつて倒れたので、彼女はその屍を路傍の畑に埋めて逃れたのである。獨立軍はこの女丈夫によつて、非常に軍氣が鼓吹されたといふことである。

この女丈夫こそ、今のリカルテ夫人アゲタさんで、カフェーにゐる娘さんは、その時アゲタ夫人が背負つて逃げた娘である。夫人はかくして寡婦となり、また愛妻を失つたリカルテは、後に再び香港に亡命するに及び、この夫人とまためぐり逢つて、盡きせぬ運命を永遠に契るに至つたもので、リカルテ氏が晩節を全うしてゐる半の功は、實にこの女傑に歸すべきものである。さぞやアゲタ夫人の亡夫は地下で、世に残した愛妻が、忘れ片身を抱いて親友の許に嫁し、なほも祖

國のために働いてゐるのを悦んでゐるだろう。

五、筏船の脱走

リカルテ將軍も遂に衆寡敵せず、捕虜の身の上となつた。アメリカのウヅ將軍は、アギナルドの幸福なる生活を指して、彼のやうに歸順することをすすめたが、頑として死を望んでやまぬので、止むなく軍艦オレゴン號にのせて、同志と共に、あの有名な無線電信のあるグアム島に流したのであつた。

彼はここに長い間幽閉され、嚴重に看視されて、單調な怠屈な數年を経てしまつた。幾度か椰子の花の咲いては、實を結ぶのを見たが、夢にも忘れることの出来ぬのは、祖國のことである。島に残して來た同志のことである。親兄弟のことである。磯邊に打ち寄る波を見ては、故郷のことを想ひ、空に漂ふ雲をみては故郷のことを忍ぶのであつた。

その中に看視もゆるやかになり、島の中ならば、どこへでも自由に歩きまわることが許されるやうになつたので、遂に同志と共にこの太平洋上の一孤島から、大膽にも逃亡することに決した

のである。なつかしき故郷のことを思ひ、祖國の人達を思ふては、歸心矢の如きものがあつた。彼は萬一を僥倖して、運命を天にまかすことにしたのである。

グアム島の南の海岸には、深い大きな森がある。そこへ彼等は、狩りに行くやうな様子をして出掛けて、斧をもつて海岸の木を切り倒して、三ヶ月もかかつて長い筏舟を作つたのである。斧を一つ木の根元へ打ち込んで祖國を祈り、二斧打ち込んで父母を念じて、遂に筏舟を二つ作りあげたのであつた。

そこで彼等はビスケットや罐詰や水を積んで、神に祈つた。——ああ神よ。願はくば我等をして再び祖國のために働かしめよと。そこで彼等は死なばもろともで、若し運命にめぐまれたならば逢ふであらうと、リカルテとその部下の七人はこの二つの筏舟に分乗して、千里の荒海に運命を託したのであつた。

まつ闇な晩の海岸から、二つの怪しい火のない筏が漕ぎ出して、沖の方へ消えてしまつたのである。實にこれこの島に幽閉されてから七年目であつた。

波にゆられ、風にもてあそばれつつ、姉妹の筏舟は何時とはなしに分れてしまつた。夜が更け

てゆくと、南の空には南十字星がまたたき、山のやうな大きな波が、舟を上げたり下げたりしてゐる。嵐も出て来て、この木の葉のやうな筏舟はひっくりかへつてしまふか、それとも漂ひあるいて、食糧が盡きてしまふのではあるまいか。ただ幸なことには貿易風が西へ西へと吹いてゐることだけである。

晝は青々とした空と海を四圍に見るばかり、舟は進んでゐるのか退いてゐるのか、漂ふてゐるのか分らない。時計に附いてゐる小さな磁石によつて、舳をただ西南に向けてゐるだけである。鱈は時々飢えた口を開けては、筏舟をくつがへさうとして迫つて來るのであつた。

晝も夜もこの廣い太平洋に漂つて、あてのない希望を夢みてゐると、やがて三日月が淡く東の空にかかつたので、一同は一齊にその三日月を仰いで、武運の長久を祈つたとのことである。

——グアム島から筏舟に乗つて逃げ出すと云ふことは、既に冒険と云へば、實に大膽至極の冒険であり、丁度傳説の勇士のことを目のあたり見るやうな氣がするのである。彼等の前には生もなく死もなく、ただ祖國に捧げる真心だけである。彼等が月を仰いで、感じた心持こそ、これまことに一篇の詩ではないか。史劇の悲壯な場面である。詩であり劇であり物語である。英雄とは生活

を以つて詩の句となすものではあるまいか。月を仰ぎ、星を仰ぎ天地の悠久と人類の弱小を思ひ、然も人間なるが故に祖國を愛するの情よ。餘りに泣かされるではないか。

漂流すること旬日、遂に満月に導かれて舟は陸にたどり着いた。運命の神にまだ見離されなかつた。二艘の筏舟は無事に英領ボルネオの東端なるサンダンカンの近くへ着いたのである。——彼等は奇蹟的に島を脱し、奇蹟的に目的の地へ着いたのであつた。同志の舟が著いてゐるのを見て、『おお生きてゐるか』と彼等はしつかりと抱き合つて、しばらくの間は言葉もなく離れなかつたといふ。彼等は飢と睡眠不足で綿のやうに疲れてゐる身を以つて、リカルテ將軍を圍んで胸上げをし、フィリッピン萬歳を叫んだのであつた。

どんなに悦しかつたことであらうか。七年間の幽閉から脱して自由の身となつた。彼等はしみじみと地を踏んで見、しみじみと空氣を吸ひ、潤々とした氣持ちで太陽を仰いだ。彼等の前には華やかな少年の日のこと、香港假政府のこと、アメリカとの苦戦のこと、死んだ同志のこと、追憶が追憶を追うて夢に入り、前途の希望は少年のやうに甦つたのだ。

ここに數日滞在して休息した後、便船を待つてシンガポールに渡り、そこで再び獨立の宣言書

を發表したのであつた。彼等が筏舟に乗つて、暗夜の海に漕ぎ出した時は、とても再びかうした宣言書を發表し得ようなどとは思はなかつたのである。宣言書を見て驚いたのはアメリカ官憲であつた。不意にリカルテ一行が姿をかくしたので、そろつて山へでも狩りに出掛けたのかと思つてゐると、二三日過ぎても歸つて來ぬので、急に騒ぎ出して全島を隈なく搜索すると、南海岸の繁つた森の中に、木を切り倒した形跡、焚火の跡があり、罐詰の空いたのがころがつてゐるのでひよつとしたら彼等は、筏を組んで、此處から逃げ出したのかも知れない。然しこの島は太平洋のまん中にある離れ小島だ。とても彼等は満足に他の島へたどりつけまい。筏が沈んで鱻の餌食になるか、喰人種の棲んでゐる珊瑚礁へでも漂流されてしまふ位が落ちたと、あきらめてゐたのであつた。

それが意外にも無事に何處かへ着いたと見へて、シンガポールから、またもや宣言を出したのである。鬼のやうな勇敢な奴共であると云つて、すつかり舌をまいてしまつた。そして早速イギリスの官憲に向つて、逮捕を依頼して來たので、領事は事面倒と見てとつて、彼に退去命令を下したのである。そこで彼は再びなつかしい思ひ出の香港へ歸つて來た時、偶然にも嘗てミンダナ

オ島で生死を共にし、最後まで働いた女丈夫にあひ、その家へ奇遇することになつたが、この寡婦と鰥夫の間には、いつしか暖かい花が咲き出したのであつた。

その楽しみもしばらくにして、またイギリスの官憲に追はれてしまつた。官憲は彼等を捕へて、香港の二哩ばかり沖にある、支那海賊の根據地である榕樹島^{コウジュウ}へ幽閉し、印度兵を二三十人ばかりつけて監視せしめることにしたのであつた。ところがこの印度兵は、リカルテを監視してゐる中に、すつかり彼の人格と識見に敬服してしまつて、監視どころか、彼の同志になつてしまつた。その印度兵等は自分の國だつてイギリスに占領されてゐるのだ、フィリッピンを獨立させてから、こんどは印度の獨立だといつて、同じ主義を奉ずるやうになつた。

それから間もなく、支那海賊共も、リカルテの話をきいて、彼等の方から交際を求めて來て、リカルテはその島の王様になつてしまつたのだ。印度兵と海賊とが一しよになつて、その島の荒地を開墾して立派な畑にし、畑の道にはルーナー道路^{ロウナー}とかリザール道路^{リザール}とか云ふ、フィリッピンの死んだ志士の名をつけ、山からは木を伐り出して、立派な邸宅を建て、フィリッピンの獨立旗を掲げて、すつかり獨立の本部になつてしまつた。

かくして幽閉の地は、却つて官憲の眼の光らない自由の樂天地となり、フィリッピンの同志はもとより、印度や支那や日本の志士は、みなそこへ集つて来て、アジア人種勃興の策源地の如くになつてしまつた。島が此様に開けたにも係らず、リカルテは香港に残した愛人のことを云ひもせず、また呼んだらどうか、と云つても承諾せぬので、印度兵は遂に粹をきかせて香港へ渡り、アゲタ夫人を取調べる件があると云つて連れ出し、娘と共に島の女王として迎へたのである。かくしてこの島から再び獨立新聞が発行され、靜かに世間の動靜を伺つてゐる中に、歐洲大戦が勃發したのである。

六、日本へ脱出

ヨーロッパに於けるドイツの勢は益々あなどり難く、イギリスはアメリカの援助を必要とするに至つて、イギリスの官憲はこの薄命のリカルテまでを捕へてアメリカへ渡し、もつて外交上の交換問題としようとしたのである。

香港の總督はリカルテに向つて、俄かに榕樹島コウジュウを退却するやうに命じ、どこへでも望むとこ

ろへ連れて行つてやると云つたので、リカルテは即座に香港を希望したが、香港に置く位なら、何もこの島から退去を命じはせぬと云ふので、第二にポルトガル領の厦門を望んだところが、これもフィリッピンに近いから許さぬと云ふので、第三に上海を持ち出したところが、やつと許された。日本へは始めから許されなかつた。

リカルテは重要な秘密書類や、必需品をまとめて、トランクに入れて秘書官と共に、香港の水

上警察のランチに乗つて榕樹島を立ち出で、香港への船をさして行つたのである。幾つも幾つもイギリスの國旗の立つてゐる船をぬうて、警察のランチは、アメリカの國旗を掲げてゐる軍艦の左舷へびたりと横づけになつた。軍艦からはするすると、起重機の綱がおりて来て、トランクを艦上に引き上げてしまひ、警察の署長は梯子を指して、「これから艦へのぼつて行け」といふのだ。

これを見たリカルテは、火のやうに怒つてしまつた。このベテンに對して、臟腑が煮えかへるやうに怒つた。

『なぜ俺をアメリカの軍艦へ連れ出した。俺をだましてアメリカへ渡さうと云ふのであつたの

か。俺はイギリスの國旗によつて保護して安全な場所へ逃すといふので、この船に乗つたのではないか。イギリスともあらうものが怪しからぬ。殺されても断じて乗らぬ。どうにでもしろ。』とリカルテが吐鳴ると、警察の署長もさるもので、水夫に命じて暴力で彼を、上艦せしめようといふ様子が見えたので、リカルテは今はいまだと覺悟をきめて、いきなりピストルを出して、ランチに掲げてあるイギリスの國旗にさし向けた。そして聲高に叫んだ。

『よし俺を暴力で捕へるなら捕へて見ろ。俺はイギリスの國旗に保護される約束で來たのに、この旗がベテンをやるなら、俺はこの國旗を打ち破つて此處で死ぬ。さあ體にさわつて見ろ。』秘書も續いてピストルを取り出して叫んだ。

『署長よ、打つぞ。ランチを離せ。そして榕樹島へ引きかへせ。死にたくないのなら早く引きかへせ。』

『イギリスの國旗にピストルを向けるのは、イギリスの皇帝にピストルを向けることと同じなのだ。貴様の國のキングにピストルを向けてほしいのか。』

その劍幕には、水上警察署長もどうすることも出來ず、すこすこと部下に命令を下して、ラン

チをアメリカの軍艦から離し、やつと上海行の船にのせられた。これはイギリスに船籍のある、支那の招商局の吳淞號といふ船であつた。

アメリカの軍艦へ、ほうり上げられたトランクについては、リカルテはその後になつて、上海の國際裁判所に對して、香港總督サー・ウリアム・メーを窃盜で訴へてゐるが、そのままに握りつぶされてしまつた。

かくてやつとアメリカの軍艦に囚はるる厄を免かれて、上海の埠頭に立つて、ほつとする間もなく、ここにもアメリカの悪い魔手が待ちかまへてゐて、彼が町へ入りかかると、いきなり建物の横から、七八名の支那の無頼漢らしいのが飛び出して、うむを云はせず、手どり足どりして縛つた上、自動車にのせて、どこかへ連れ去つてしまつた。リカルテは縛られながら、齒ざしりをしたけれども、どうすることも出來なかつた。

彼はこのままに、この地下室で暗殺されてしまはねばならぬのか、それともまた再びアメリカに護送されるのであらうかと、流石に悲運の涙に暮れたのであつた。水とパンが差し入れられる時、リカルテはふと一縷の望みを抱いて、ノート紙を破つて地下室に囚はれてゐることを認め

て、支那のゴックを買収して、これをそつとフランスの領事館に届けさせたのである。

この密書を得たフランスの公使は、非常に驚いて、自らアメリカの領事館に飛んで行つて、嚴重な談判をすると共に、一方人を走らせて、リカルテの監禁されてゐる場所を搜索させた。場所は幸にもフランス租界であつたので、事はすらすらと運んで、無事に再び彼は日光を仰ぐことが出来たのであつた。

恐ろしい上海に於て、しばらくフランス領事に保護されてゐたが、ここは危険で仕方がないので、彼は更に日本へ落ちのびて來たのである。

x

x

x

大正十二年九月一日の地震の朝、リカルテは、横濱のグラランド・ホテルへ、フィリッピンの獨立黨の幹部である、下院議員のクエソンが獨立運動の目的で渡米するため、横濱へ立寄つたのに逢ひに行つたのであるが、ここでも親子三人とも不思議に助かつたのであつた。グラランド・ホテルでは三百人位の死傷者が出たにも係らず、將軍の家族は怪我一つしなかつたのは全くの天佑であつた。天はまだフィリッピンを見捨てない證據であらう。

地震で死んだか、それとも朝鮮人と間違つて殺ろされなかつたかと友人達が心配してゐたら、ひよつくり東京へ歸つて來た。

その後本國の有志の後援で、横濱に前記のカフェを開き、晝は世田ヶ谷の殖民學校へ通つて、スペイン語の教授に糊口を凌いでゐる。日本人の有志が家を提供し、生活費を貢うと云つても、決して辭退して受けず、自ら働いて食ふと云つて、日本人からの物質的援助は受けなかつた。天晴れな精神である。

アゲタ夫人は男まさりで、リカルテの無口に比して、常に氣焰萬丈だ。酒も飲めば議論もし、獨立の志士達にとつて、良い『お母さん』だ。夫妻とも今年で五十七歳だ。娘はロザリオと云つて今年たしか二十三四歳のはずだ。横濱へ行つた人達は、是非一度この英雄カフェを訪れて、孤獨な人達を慰めて來てほしいものである。

(大正十三年十月「東洋」)

追記

リカルテ將軍は昭和十六年十二月二十四日に横濱から勇躍して芽出度く歸國し、宇佐彦齋氏は翌十七年二月七日に將軍と軍部の顧問を兼て飛行機で出發した。近いに二人とマニラで逢へるのが楽しみだ。

棕 梠 の 花

— 棕梠の花を見ての幻想 —

棕梠の花

お前の乳房を見てゐると

マツカッサーの女を憶ひ出す

白人の覇權をくつがへし

世界を有色人種の手に戻すため

有色人同盟を結ぼうと

印度の獨立黨の志士に逢はうとて

僕は神戸から汽船に乗つて

途中 マツカッサーで下船した

それは社會改革の資金を作るため

商人になつて金を儲けやうとて

中學を卒業すると直ぐ

單身、國を飛び出して

マツカッサーで貿易をやつて成功してゐる

竹馬の友のKに逢ふためであつた

まつ黒に日に焼けて

昔かはらぬ元氣が

五體中に充ちてゐるKは

涼しい風のペランダに僕を迎へて

中學時代のやうに熱烈きで
日本改革の理想を語つた

「ああ君よ日本の改革も近づいた
君が久しぶりで國へ歸るのも

もう ちきであるだらうよ」

飲み物は氷のやうに冷たく

南洋の光線が椰子の葉に

ざらざらと輝いて踊り

ペランダの風は涼しかった

俺はよくKに連れられて

首都のほど近い田舎の

會長の家に遊びに行つた。

(會長はKのよい取引先であつた)

そして夜遅く

海岸の一本道を

芳醇な椰子酒に酔つぱらつて

夜風に頬を吹かれながら

天下でも取つたやうな氣持になつて

革命の歌を聲張り上げて唄つて

ぶらりぶらりと歸つたものだ

ある晩、僕は一人で

會長の家へ遊びに行き

例の椰子酒に酔つぱらつて

いつもの道をぶらりぶらりと
よい氣持になつて歸つて来た——
その晩は月が明るくて
椰子の幹の影が長く
道の上に縞をなして横はり
海の彼方を見ると
波が銀色に光つて打ち寄せてゐた
波の音はさわやかに
南洋の夜の風は肌に冷たく
椰子の葉影は地上に美しかった
僕はすつかり詩人になつて
この氣持のよい夜の氣分を

味ひながら ぶらりぶらりと歩いて来た
と——突然、僕はもの聲に驚いた
僕のうしろから人影が
何事かと叫びながら
追ひかけて来るではないか！
僕は立ち止つて椰子の幹を後盾にし
短刀の柄つかを固く握つて待つてゐた
人影は近づいた
見ると それは會長の娘だ
僕の腕にしなだれかかつて
何事かを早口に喋り立てる

それで僕は娘を磯邊に誘ふて
濱の白い砂を褥しとねにした——
星は稀れに月は明るくて
二人の抱擁のあたりには
南洋の波の音と潮の香がみちてゐて
時どき二人をば祝福するやうに
椰子の花粉がこぼれて来た

それから二人は毎晩のやうに
逢曳あひだきするのが常となつた
椰子酒の酔ひはほんのりと軽く
椰子の影の静寂な海岸で——

一ヶ月あまり僕はKの許にゐたが
便船がやつて来たので
僕は黙つてそこを立つたが
蟹かに女が片身にくれたルビーは
今でも僕のネクタイピンになつてゐる

ああ それはもう一昨年のことだ
あの蟹女は今どうしてゐるだらうか
僕が突然見えなくなつたので
例の海岸へ来ては泣いたのではあるまいか
ひよつとしたら あの蟹女は
僕の子供を生んだかも知れないな

棕栢の花

ほろほろと散る棕栢の花

お前の乳房を見てゐると

マツカッサーの女を憶ひ出す――

お前の乳房のふくよかさ

樹幹が椰子に似るまでも

ああ 二人の温い抱擁の上に

ほろほろと花粉がこぼれたあの夜のこと

――大正十年作――

奥書

余は宇佐彦齋氏と、深い因縁に結ばれてゐる。氏は勝海舟翁の最年少の門下生で、翁の葬儀には棺側立ち、『海舟全集』の編輯者である。余が氏を識つた當時、氏も余と共に、相當に窮して居り、氏は貧弱な醫學雜誌に糊口し、余は野良犬の如く都會に放浪した。たまたま君は余に一文の寄稿を求め、余は戯れに漢方醫學に關する小私見を草した。思はざりき、これ余が漢方醫學を絶滅から救ひ、世界的流行を來さしむる、そもその發端をなさうとは。余は人生途上に、思はぬ怪我の功名をした。

まこと運命の轉變は知るべくもない。昨日まで世に容れられず、滿腔の不滿を南洋の天地に放つて、乾坤一擲の快事に、溜飲を三斗たらしめんとし、リカルテ將軍と宇佐翁を中心に再舉を策し、下位春吉氏を語らつて、イタリーから飛行機まで貰ふ約束した謀反兒は、今日は、しかつめらしく藥室に納つて、天晴れな漢方醫學先生となつた。而して玄關の衝立に大書して曰く『大醫は國を醫し、中醫は人を醫す、失笑す何の業障ぞ、自らを中醫に擬す』と。昔を知る者は啞然として云ふ所を知らず、狂人忠直は一躍して山師中山に急變した。然し元より醫籍を耽讀しての篤學ではなく、無學をもつて自らを低くしたが、信賴の集るを如何せん。門前俄かに市をなし、治を乞ふ者上は大臣大將から、下庶民に及んだ。だが本來、風塵を友とする身の、明け暮れ病者を相手とするの退屈さにたへられず、如何にかして醫者の眞似から逃げ出さんとしても、哀號の追ひすがるを如何せん。

滿洲事變が勃發し、更に日支事變に進展するや、早くもこれが世界戦に擴大するを豫想し、徒らに小乘的療病の慈悲に、國家

の大局を忘るべき時に非ずと、斷乎として醫界と絶縁し、筆禍や入獄の危険を冒して『我が日本學』と『日本に適する政治』を
自費で發行して讀者に配った。

かかる中、シンガポールの陥落が間近に迫つた一月二十六日、余は某方面から、余の専攻とせる地政學上の或調査のため、
南洋に赴くことを求められた。入獄覺悟の時弊に對する直言の書は、思はぬ所で共鳴者を得た譯である。

南洋は多年、余の憧憬の樂園、余は勇躍してその招致に應ずることにした。行くのは三月中旬でよいとのこと。それを待つ間
に、俄かに思ひ立つて本書を作ることにした次第だ。

余は若い日、英米の暴虐に血を逆流させ、その痛快な覆滅を想ふる時、自らそれは詩となつて逆流した。然し英米に對する審
判の聖火が天に沖する今日かへつて詩が作れない。十二月八日、ハワイ爆撃のラジオを聞いた刹那、余は別に血も湧かず、肉も
踊らず、痛快などいふ氣持は微塵もなく、妙に心が靜かで複雑であつた。それは言葉で現はせぬ氣持で、やれやれヤツと來るべ
きものが來たと、重荷をおろしてホットした、放心に似た湧るな氣持であつた。

チャンヂャンと喋り立てるラジオの軍樂を聞きながら、思ひ出となるべき、この日、この時の氣持を詩に作らうと、ペンを取
るには取つて見たものの、かかる湧るな氣持からは絶えて詩が湧かぬ。強いてその日の記念にと、拙ない繪を數點、からつじて
描き得たに過ぎぬ。

それにしても昨日まで、愛國の愛の字も持たず、頹廢的な亡國的なセンチメンタルな詩に、國家を毒害し、余をして痛恨せし
めてゐた詩商等が、今日は俄かに時局に便乗し愛國詩人に早變りしてゐる身輕さには苦笑せしめられる。いつたい彼等は本氣

で、戰勝を歌つてゐるのかしら。心の底から日本の勝利が悦しいのかしら、これは余が戰勝詩を作れぬ負惜みから云ふのではな
い。かかる偉大な勝利は、言語に絶して、詩句に表現されぬ筈だ。余は詩商の愛國詩が虚偽に非ざるかとさへ疑ひたくなる。

さもあれ文を劍とする者に、筆の記念なきは一種の淋しみであり、その淋しみを淋しめる折も折、シンガポール行きの間談を
受け、俄かに舊稿を再録して、大東亞戰の記念詩に代ふることにした。

昭和十七年四月五日印刷
昭和十七年四月十日發行

非賣品

著作兼
發行人

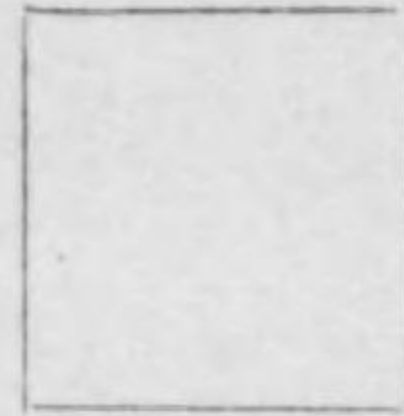
東京市牛込區若松町十二
中山忠直

印刷人

東京市芝區濱松町一ノ三
松井巳壽

印刷所

東京市芝區濱松町一ノ三
松壽堂印刷所





終

